



Title	党史と政権 : 歴史的・比較的研究
Author(s)	木村, 汎; Kimura, Hiroshi
Citation	スラヴ研究, 16, 1-55
Issue Date	1972
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5016
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112943.pdf



党 史 と 政 権

—歴史的・比較的研究—*

木 村 汎

〔目 次〕

まえがき	(1) “スターリン”問題
I 歴史的概観	(2) “フルシチョフ”問題
II 比較的アプローチ	III ブレジネフ政権

ま え が き

—「ネルジンは、つぎつぎに出る党史（党史は数種類出版され、その各々が違っていた）をみな読んだ。」ソルジェニーツィン『煉獄のなかで』¹⁾—

情報過多といわれる現代の例外をなし、いぜんとして秘密の緞帳を深くおろし、臆測以外われわれの接近を厳しく拒み、客観的な研究のネックをなしているのが、ソビエト政治の世界である。しかし、それは、ただたんに厳格な検閲制度によって外界からの接触のチャンスが可能なかぎりシャット・アウトせんとする、いわば量的な情報の僅少性のみ由来するのではない。そこでの困難性は、そのように限定されて入手される資料のすべてが、党や国家の好む方向にコントロールされ着色されたものであるという質的な事情によって、さらに倍加される。つまり、ソ連では、科学を含む一さいの人間活動についての情報は、正確な事実をインフォームすることではなく、人間を一定の政治目標に向かって「動員する」(mobilize)²⁾ することを、第一の狙いとしている³⁾。したがって、このように一方的で歪んだ報道を即事実ないし真実と受けとめることは危険きわまりなく、研究者の蔽に戒めなければならないこと改めて説くまでもない。

にもかかわらず、これらのソビエト出版・報道物は重要かつ注目に値するのである。なぜか？ その訳は、それ以外に資料がないということの他に、つぎの事情にもとづく。たとえソビエトの報道・出版が特定体制に都合のよい教義を人民大衆に伝達・普及すること

* 本稿の要約（約三分の一）として、早川徹訳『ソヴェト連邦共産党史（追補第三版）』（東京：読売新聞社、1972）、「下巻」所収の拙解説「四つの『党史』を比較して」pp. 975～1000も参照。

1) 傍点——木村。Alexander I. Solzhenitsyn. *The First Circle* (New York: Harper & Row, Publishers, 1968, p. 230; 木村浩/松永緑弥訳『煉獄のなかで』I (東京：タイム・ライフ・インターナショナル、1969), p. 236.

2) ソビエト体制を「動員 (mobilization) 体制」の典型とみる最近の西側の研究動向にかんしては、David E. Apter, *The Politics of Modernization*. (Chicago: The University of Chicago Press, 1965); Chalmers Johnson. (ed.), *Change in Communist Systems*. (Stanford, California: Stanford University Press, 1970); Amitai Etzioni, *The Active Society: A Theory of Societal and Political Processes*. (New York: The Free Press, 1968), pp. 388-90 参照。

3) 辻村明氏は、社会主義社会における情報の特徴を、①政治権力の全体的統制、②一元的な情報による指導、③大衆への不信、④プリミティブな情報手段の発達、⑤流言の横行、に求めておられる。辻村明『大衆社会と社会主義社会』（東京：東大出版会、1967）、p. 77.

を目的とする宣伝媒体であるにしても（またそうならば尚さら）、それは亦宣伝一般の法則に服さねばならぬ。即ち、宣伝は送り手によって操作されたものであるとはいえ、その効率は受け手たる民衆の反応の函数によって示され、しかもそのさい「虚偽は、結局は宣伝を阻害する」⁴⁾からである。受け手が真面目に受けとめないパンフレットの生産はただ徒らに無意味な反古の山の構築にすぎないのである。ここにおいて、ソビエト指導者の側は限界にぶち当たざるをえない。つまり、報道・出版の百パーセント政治化・官製化は不可能なのだ。その中になにがしかの本物の情報を挿入しなければ、受け手に見向きもされなくなるのである。

そして、このように混入された一握りの真の情報こそ、ソビエト社会の研究者がまさに見逃してはならぬ貴重な資料である。ここに「いかに僅小な断片的証拠であれ、それを手掛りにして、クレムリン城壁内で進行中のことを推論する神秘科学」⁵⁾としてのクレムリノロジーが作動を開始せねばならない。もちろん膨大な贗物のなかから真理の一片をえり分けキャッチすることは至難の技である。しかし、これ以外に方法はなく、又ていどの差こそあれ他のいかなる体制にかんしても行なわれている作業である。そして、そのさい要請される最も有効なアプローチは、ソビエト資料を注意深く継続的に比較検討することであり、かくしてはじめて一枚岩的な報道管制下におかれているソビエト文書にもその記述の僅かばかりの強弱の推移に重大な政策や指導者の変化が、反映せしめられていることに気づくであろう。亡命後西側最大のソ連通となった W. レオンハルトもいう。「ソビエト・システムのもっとも明敏な鑑定家ですら、唯一つのソビエト覚え書きまたは唯一つの党決議を分析するのでは、ほとんどなんらの発展傾向について語りえないだろう。だが、ドイツ問題にかんするすべてのソビエト覚え書きまたはスターリン死後の企業経営にかんするすべての党ドキュメントや公式論文を比較するならば、興味深く広範な結論が与えられるであろう」⁶⁾（傍点—木村）、と。

さて、前置きが長くなったが、以上のような問題意識にもとづき、本稿において筆者が試みようとするのは、ソ党史の比較研究である。間違いなく同一系統とみなしてよい一冊本の「ソ連共産党史」が過去四種類⁷⁾発行されハンデイであるうえに、それらはそれぞれスターリン、フルシチョフ（二種）、ブレジネフ期⁸⁾にまたがって刊行されたためその間の

4) Jean-Marie Domenach, *La Propagande Politique*. (Paris: Presses Universitaires de France, 1969), p. 98. 小出峻訳『政治宣伝』（東京：白水社、1967）、p. 102.

5) Robert V. Daniels, "Soviet Politics Since Khrushchev," John W. Strong (ed.), *The Soviet Union under Brezhnev and Kosygin*. (New York: Van Nostrand Reinhold Company, Ltd., 1971), p. 16.

6) Wolfgang Leonhard, *Kreml ohne Stalin*. (Köln: Verlag für Politik und Wirtschaft, 1959), S. 35.

7) 第一は、*История всесоюзной коммунистической партии (большевиков): Краткий курс*, 1938. 第二は、*История коммунистической партии Советского Союза*, 1959. 第三は、*История коммунистической партии Советского Союза (издание второе, дополненное)*, 1962. 第四は、*История коммунистической партии Советского Союза (издание третье, дополненное)*. 1969.

8) ブレジネフ期の第二のもの、即ち『ソ連共産党史（追補第四版）』*История коммунистической партии Советского Союза (издание четвертое, дополненное)*. (Москва: Политиздат, 1971) の刊行が1971年末に予定されているが（*Новые Книги СССР*. Москва: «Международная книга», № 21, стр. 50）、筆者は脱稿時の現在まだ入手していない。

差異はきわだっており、筆者によるまず手はじめとしてのプリミティブなコンテンツ・アナリシスの操作対象として恰好と思われる⁹⁾。大方の忌憚なき批判を乞いたい。

そのさい、四種類の党史の検討は、大別して二つの作業に分けられよう。一は、歴史的な推移のなかに変化の要因を模索する試みで、いわば vertical なアプローチといえよう (I)。二は、文字通り四つの党史を同一組上に載せての比較、即ち horizontal なアプローチである (II)。だが、政治学徒の最終目標は歴史のための歴史、比較のための比較にはなく、あくまでそれらを踏まえての現地点の分析 (そして未来予測) にある¹⁰⁾。それ故、この二つの作業中においても筆者の最大の関心が最新版たる『ソ党史 (第三版)』 (仮に ‘ブレジネフ’ 党史) に向けられることは言うまでもないが、さらに問題をこの点のみに絞り『党史 (第三版)』を素材に使い現ブレジネフ政権の基本路線を直接集中的に探求してみる必要がある (III)。

I 歴史的概観

先に科学を含む一さいのソビエト社会の情報活動が政治化するのを阻止する要素として、それら情報の受け手たる民衆の存在を挙げたが、もう一つ忘れてはならない制約要素がある。それは、情報の直接のつくり手たる人々、本稿との関連でいうならば歴史家たちである。たしかに、ソビエト歴史学者たちは、科学アカデミー歴史部会、マルクス・レーニン主義研究所等に所属し、党中央委煽動宣伝部の監督・管轄に服し、体制イデオロギーの鼓吹・宣伝に奉仕する忠実な存在ではある。だが、その専門家としての知識、経験、プライドから、完全な体制の道具となることを拒み、たとえ僅かではあれ体制からの距離と独立を確保せんとする職業集団でもある¹¹⁾。もしソビエト体制が彼らの絶対的の反抗——たとえ「受動的な」それであれ——を招き、彼らの自発的協力がえられなくなれば、体制正当化のための神話づくりや啓蒙・普及活動はたちまち絶大なるピンチに追い込まれること必定である。ここに、歴史家たちと体制とのその時々々の力関係を反映しての微妙な綱引き競争が展開する基盤がある。したがって、ソ連における政治と歴史学との関係は、アメリカの専門家 S. ヤコブソンが述べるごとく、「命令的アプローチと自由選択との事実そのもの per se でなく、体制の政治的基礎の強化に関心のある国家ならび党当局によって前もって規定さ

9) このほか、同名の「ソ連共産党史」と題するものが紛らわしいほど多種多様に存在するが、いずれも本稿の対象とする一冊本の公式党史と同列に比較されるべき類のものでないことに注意。たとえば、教科書風に編纂された *История КПСС: Учебно-методическое пособие для заочников*. (Москва: Издательство «Высшая школа», 1970); 写真図解入りの四巻本 *История КПСС*. (Москва: Политиздат, 1970); さらにこれらと比較にならぬほど重要なものとして、目下刊行継続中の六巻本 *История КПСС (в шести томах)* (Москва: Политиздат, 1964~) があり、これは全巻完了の暁に、ソ連邦において最も大部で権威ある党史決定版となることが約束されているものではあるが、やはり本稿の対象外である。

10) G. エンティーンも述べる。「ソビエト生活の西側観測者は、ソビエト歴史学を政治的バロメーターとして解説する。彼らによって意識的に描かれた諸事件よりも声明の性格こそが研究の対象である」と。George Enteen, “Two Books on Soviet Historiography,” *World Politics*. (Jan. 1968) p. 327.

11) この「ソ連邦における歴史学の政治からの相対的独立性」が、N. Heer 女史の卓越したハーバート大学提出博士論文の結論である。Nancy Whittier Heer, *Politics and History in the Soviet Union*. (Cambridge, Massachusetts; The M. I. T. Press, 1971), p. 185, 257, 266 など。

れた発見と事実資料の自由な解釈との間の絶えざる葛藤のストーリー¹²⁾とみなされる。

では、体制—歴史家—民衆の三つ巴の函数としての党史は、具体的にはいかなる歴史を辿っているか？ 党史の歴史的変遷の側面を、このような視点に、その背景や内容上の特徴を織りこんで素描してみよう。

(1) 『スターリン小教程』—1938年—

第一番目の党史で、一般に「スターリン小教程」と呼ばれて悪名高い『全連邦共産党(ポリシェヴィキ)小史』¹³⁾——以下『スターリン小教程』ないし単に『小教程』と略す——は、1938年9月に出版された。1938年とは、ソ連が社会主義建設の段階をほぼ完了し、いよいよ共産主義をめざし漸進的移行を開始したと公式にみなされた転換点である。また、スターリンが、一応20年代の権力闘争期に敗北せしめていた政敵たちをさらに物理的に抹殺しることにより、自己の権力を挑戦不可能なまでに確立せしめた時期であった。このように1938年の『小教程』出版は、ソビエト国家とスターリン個人にとり、まことにタイムリーであるとともに、それ自体が一つの里程碑を劃するという象徴的価値をも担ったのである。

のちの党史がやや便宜的に「フルシチョフ党史」、「ブレジネフ党史」と略称されるのにたいし、『小教程』のばあいは名実ともに「スターリン党史」と呼ばれて然るべき理由が、二つある。一は、それが「スターリンによってつくられた」からである。『小教程』の正式の著者は編集委員会なる(匿名)集団であるが、そこでスターリンが演じた役割の大きさに異論をさしはさむ余地は全くない。彼は、少くともその一節「弁証法のおよび史的唯物論について」¹⁴⁾を自ら書きおろすほか、編集委員長として監督校閲を陣頭指揮し、全編の構成・敘述について細かい指示を与えたといわれる。したがって、実質上『小教程』をスターリンがつくった党史とみなして間違いないのである¹⁵⁾。

ついでながら、後年フルシチョフは、スターリンが『小教程』全部を一人で執筆したかのごとく主張した廉で非難した。これは、フルシチョフが、他方において『小教程』の内容自体を批判している点と矛盾するのであるが、スターリン打倒のみが念頭にあった彼は、そういう矛盾には一さいお構いなく、スターリン弾劾に役立つものは何であれ一切切切採用したのである。つまり、例の秘密演説(1956年の第20回党大会)中において、フルシチョフは、スターリンの独占的な名誉欲を示す一証左として『スターリン小伝』(1951)の校正刷が最終刷にいたる経過中に、『小教程』の著者が集団から個人(=スターリン)へ

12) Sergious Yakobson, "Postwar Historical Research in the Soviet Union," *Annals of the American Academy of Political and Social Science*. (CCLXIII, 1949). p. 123.

13) 筆者の所持しているのは、*История всесоюзной коммунистической партии (большевиков). Краткий курс*. под ред. комиссии ЦК ВКП(б), одобрен ЦК ВКП(б) 1938, (Москва: Госполитиздат, 1950) —以下 *Краткий курс* と略す—。田岡信太郎訳『全連邦共産党小史』(東京: 大雅堂, 1946)などの旧訳ほか、東方出版部訳『ソ連共産党(ポリシェヴィキ)歴史小教程』(東京: 東方書店, 1971)などがある。

14) "О диалектическом и историческом материализме," *Краткий курс*, стр. 99-127.

15) 否、『小教程』を、スターリンの「主作品」(chef d'oeuvre)と呼ぶ者さえいる。Bertram D. Wolf, "Party Histories from Lenin to Khrushchev," John Keep, (ed.), *Contemporary History in the Soviet Mirror*. (New York: Frederick A. Praeger, 1964) p. 58.

と、つぎのように名義変更された例を指摘した¹⁶⁾。

〔『スターリン小伝』校正刷〕

全連邦共産党（ボ）中央委員会の小委員会は、同志スターリンの指導下に、その最も積極的な個人的参加を得て、『全連邦共産党（ボ）小教程』を準備した¹⁷⁾。

〔『スターリン小伝』最終刷〕

一九三八年同志スターリンによって執筆され、全連邦共産党中央委員会（ボ）の小委員会で承認された『全連邦共産党（ボ）小教程』が現われた¹⁸⁾。

二は、『小教程』が、レーニンを除けば、「スターリンを『主人公』として中心に据えた」党史だからである。それは、まず、1) 党史がスターリン個人の発言やビヘイヴィヤー中心に展開してゆく内容構成になっている事実をさす。この西側専門家によって「党史の個人化」(B. ウルフ)¹⁹⁾と名づけられる現象は、後にソ連内部でも指弾の的となった。たとえば、フルシチョフは、例の秘密演説の中で、『小教程』が主として「スターリン、スターリンの演説、スターリンの報告」について語り、すべてのことをいささかの例外もなく「スターリンの名称と結びつけている」²⁰⁾と非難した。つぎに、2) 『小教程』におけるスターリンは栄光に包まれた勝利の『英雄』として現われている事実をさす。同書中には、「レーニンとスターリン」、「レーニン・スターリン」といった風にスターリンをレーニンと等価同列に高めた記述が見られる²¹⁾ほか、スターリン個人の言動をつぎのように極度に美化した修飾句や讃辞は枚挙に暇がない。曰く、スターリンは、「レーニンの戦友であり、生徒であり」、「レーニンの立場を全面的に支持し」、「党の名において偉大なる誓いをたて」、「党を中央委員会のまわりに団結させ」（ただし、別の箇所では、「党はスターリンのまわりに団結」とある）、「最も偉大な政治的意義を有する論文」を書き、「歴史的意義を有する発言」や「大きな意義をもつ報告」をおこない、「トロツキズムとの闘争に総決算をつけ」、「重大な革命活動を遂行した」²²⁾、等々。この西側専門家によって「スターリンの栄光化」(L. シャピーロ)²³⁾と名づけられる現象も、後にソ連内部で非難されることになった。たとえば、フルシチョフは、同じく秘密演説の中で、「スターリンは自己の人格を賞め讃え、光栄ある共産党の10月革命以後のすべての歴史的な全時期をひとえに『スターリンの天才』の行動に変形せしめている」²⁴⁾と攻撃した。さらに、自らが著者であると主張する書物の中でのスターリン自身による自己讃美の厚顔無恥ぶりを批判して、「マルクス・レーニン主義者がこのように自分自身のことを書き、自己の人格を天に届く

16) “Secret Speech of Khrushchev concerning the ‘Cult of the Individual,’ Delivered at the Twentieth Congress of the Communist Party of the Soviet Union, February 25, 1956,” The Russian Institute, Columbia University, (ed), *The Anti-Stalin Campaign and International Communism* (New York: Columbia University Press, 1966) p. 72.

17) *Ibid.*

18) マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所編、宮本良夫訳、『スターリン小伝』（東京：大月書店国民文庫、1953）、p. 122.

19) Wolf, *op. cit.*, p. 67.

20) “Secret Speech of Khrushchev ...,” p. 73.

21) *Краткий курс*, стр. 224, 249, 336.

22) *Там же*, стр. 187, 132, 256, 255, 266, 295, 300, 182, 255, 77.

23) Leonard Schapiro, “Continuity and Change in the New History of the CPSU,” *Contemporary History ...*, p. 76.

24) “Secret Speech ...,” p. 73.

まで賞讃することができるものか』²⁵⁾と弾劾した。

また、『小教程』は、「善玉、同様、「悪玉、も至極明解な形でうち出しているのが特色をなす。エネミー・ナンバー・ワンとされたのは、トロツキーである²⁶⁾。トロツキーは、『小教程』刊行当時すでにメキシコに亡命中で、スターリンにとりなんら現実的な脅威とならなかったはずであるが、スターリンは、国の内外におけるその侮るべからざる影響力のゆえにトロツキーがあらゆる反スターリン派を糾合する精神的結節点となることを惧れたのである。そしてこの最大の「悪玉、トロツキーに唆かされそのまわりに囲集して陰謀を企んでいるとされたのは、ピャタコフ、ラデック、ラコフスキーらのトロツキストたち、そしてジノーヴィエフ、カーメネフ、ブハーリンらであった。トロツキーおよび彼とジノーヴィエフ連合に向けられた『小教程』のレッテルはただ凄絶の一語に尽きる。たとえば、「人民の敵」、「労働者階級の欺瞞者」、「外国情報機関によって編成されたスパイ」、「節操のない立身出世主義者」、「度し難い二股膏藥」、「政治的ペテン師」、等々。さらに『小教程』最終章最終節のタイトルも、「ブハーリン＝トロツキー的スパイ、害毒者、裏切者の残党の精算」²⁹⁾と題されている。最後に、『小教程』は、これら国内の裏切者たちの背後で彼らを操り使喚しているのが帝国主義者ことに日独ファシストに他ならぬと断定する²⁹⁾。

もちろん、かような「善玉－悪玉」ないし「友－敵」の図式を単純明解にうちだした完全な勸善懲悪型の『小教程』がふつうの意味での歴史書たるはずはない。良くも悪くも一定の立場をとることを正直すぎるほど卒直にうち出した政治的パンフレットとみなしたほうがよい。いな、逆に、特定政権を宣伝・擁護するための資料たることこそ、『小教程』が当初からめざした目標なのであり、この意図は、『小教程』出版に付随した党中央委の特別布告中に公表されていた。すなわち、布告「《全連邦共産党史小教程》出版にかんする党宣伝の実施について」(1938. 11. 14)は、『小教程』の課題が「マルクス・レーニン主義にかんする有害な俗流化を排する」ことによって「党史にかんする統一的指導を可能にし」「理論・宣伝活動に従事している幹部要員に資する」ためにある旨、明確に宣言していた³⁰⁾。つまり、この『小教程』出版は、対インテリ宣伝を従来の口頭による方法から印刷物へ転換³¹⁾するにさいしての最適の宣伝媒体を提供するものと目されたのである。かくして、『小教程』は、「ソ連邦におけるすべての政治教育の基本テキスト」、「党の基本的イデ

25) *Ibid.*

26) トロツキーは、その後のすべての版で非難され、「党史の数少ない固定された点の一つ (one of the few fixed points)」になっている。ただし、かつての「裏切りの陰謀家というイメージから政治上の敵」という風やや非難のニュアンスが変ってきていることに注意。Nancy Whittier Heer. *Politics and History in the Soviet Union*. (Cambridge, Massachusetts: M. I. T. Press, 1971), pp. 215-217. 少なくとも1917年におけるトロツキーの功績に触れようとする最近のソビエト歴史家の動きについて、“Discussion of the draft third volume of the History of the CPSU,” *Survey*. (No. 63. April 1967), p. 161.

27) *Краткий курс*, стр. 226-227.

28) *Там же*. стр. 331.

29) *Там же*. стр. 312.

30) “О постановке партийной пропаганды в связи с выпуском «краткого курса истории ВКП (б)»,» *КПСС в резолюциях и решениях съездов конференций и пленумов ЦК*. часть II. (Москва: Госполитиздат, 1953), стр. 859-860.

31) *Там же*, стр. 865.

オロギー文献」,「^{カテキズム}党の教義問答書」,「諸科学の百科辞典」として,スターリンの死(1953)までの15年間にわたり,ソ連,諸外国の共産党,そして国際共産主義運動の^{バイブル}聖典として君臨しつづけた。総発行部数5,000万部といわれる。

(2) 党史不在期—緩和と引締め— —1953~1959年—

1953年3月5日のスターリン死去とともに、『スターリン小教程』もまた印刷を止め³²⁾,言及されることも次第になくなった。この時点から1959年6月フルシチョフの手によって『ソ連共産党史』が刊行されるまでの6年間,ソビエト社会には党史不在の時期が続く。だが,それは,党史の完全な空白期,すなわち党史をめぐる一切の動きの存在しなかった時期だったのではない。否,むしろ,それは,『小教程』の権威を否定し,それに代る新党史の作成を正当化するという大作業がなされた時期なのである。

改めて言うまでもなく,この価値転換は,1956年の第20回党大会で幕を切って落されたスターリン批判の歴史学における必然的な帰結として生じたのである。では,スターリン死後からその批判までの時期(1953-56年)に党史批判めいたことが全く起らなかったかという³³⁾と,答は否である。すなわち,「どっちつかずの」(A. ワース)³³⁾,「移行の」(A. マズーア)³³⁾,「混乱した中間期」(N. ヘアー)³³⁾と規定されるこの3年間に,以下のような,とり様いかなでは歴史学の分野にかんするかぎり,スターリン批判が,第20回党大会を俟たずして既に火ぶたを切っていたと解釈される諸事実が発生していたのである。

まず注目すべきは,1953年8月26日発表された党中央委付属宣伝煽動部の「ソ連共産党50周年(1903-53)記念テーゼ」(7,500字)中で,スターリンの名前がほとんど言及されなかった(レーニン—83回,スターリン—4回)事実³⁴⁾である。もっとも,スターリンの代りに他の党幹部の名前があげられたわけでもない。けだし,当時まだ明確なスターリンの後継者が出現していなかったからである。そこで,この事件は,西側の明敏なクレムリノロジストの目にとまり,混沌とした「不確定な新時代の開始を告げる兆候」(B. ウルフ)³⁵⁾と受けとめられ,さらには「公式党史修正の第一歩」(W. レオンハルト)³⁶⁾と解釈された。つぎに,1954年1月刊行の『党決議・決定集』新版にスターリン時代に含まれていなかった多くの文書が公表され,それらが『小教程』にかわる新しい党史教育の基礎とされることになった³⁷⁾。また,1954-56年にかけて『歴史の諸問題』や『コムニスト』誌上で展開された,ソビエト社会史の時代区分論争³⁸⁾によって,それまで絶対視されてきた

32) M. ラッシュによれば,スターリン死後も『小教程』は依然出版されていた(たとえば1955年9月29日に20万部)。Myron Rush, *The Rise of Khrushchev*. (Washington, D. C.: Public Affairs Press, 1958), p. 106. 安田志郎訳『ニキタ・フルシチョフ』(東京:時事通信社,1959), p. 112.

33) Alexander Werth, *Russia: Hopes and Fears*. (England: Penguin Books, 1969), p. 152. 内山敏訳『ロシア—希望と懸念—』(東京:紀伊国屋書店,1970), p. 124; Anatole G. Mazour, *Modern Russian Historiography*. (Princeton, New Jersey: D. Van Nostrand Company, Ltd., 1958), p. 242; Heer, *op. cit.*, p. 61.

34) *Правда*. (26 ноября, 1953), стр. 3-4.

35) Wolf, *op. cit.*, p. 51.

36) Leonhard, *op. cit.*, S. 192. 加藤雅彦訳『ソ連の指導者と政策』(東京:サイマル出版会,1969), p. 99.

37) *Ibid.* 同上。

38) 詳しくは,田中陽児/米川哲夫訳編『ロシア史の時代区分』(上・下)(東京:有斐閣,1959),とくに相田重夫「ソビエト社会史の時代区分論争」,pp. 429-452 参照。

『小教程』の時代区分の権威が揺り動かされることになった。

これらの事実は、たとえ先駆的意義をもつとはいえ、まだ断片的、萌芽的な胎動にしかすぎず、『スターリン小教程』にたいする正面切っの挑戦とみなしえないかもしれない。だが、第20回党大会の直前、今度はとうてい無視しえない事件が起った。1956年1月25-28日、モスクワで600名以上の『歴史の諸問題』購読者の参加をえた歴史家協議会が開かれ、同会議の席上、『歴史の諸問題』編集次長Э. Н. ブルジャーロフを先頭とするリベラルな歴史学者が、旧来のスターリニスト党史研究に重大な疑いをさしはさむ発言をおこなったのである³⁹⁾。とくに、ブルジャーロフは、「一部の党史研究者がドグマに虜われて多くの重要問題を解釈し、『小教程』の祖述に自らを閉じこめている」⁴⁰⁾事実を大胆に摘発し、スターリンによって抑圧された歴史家 M. H. ポクロフスキーの再評価を示唆した⁴¹⁾。主として党人歴史家の強い反撥に出遭って会議全体の主流とはなりえなかったとはいえ、このブルジャーロフ発言はスターリン史学批判への注目すべき重大な一矢と解釈されねばならない。

このように次第に勢いを募りつつあったスターリン史学および『小教程』の批判は、ついに第20回党大会（1956年2月14-25日）で爆発点に達した。多くのスピーカーが党史の弊害を個人崇拜に結びつけて批判したが、そのうち主なものは、フルシチョフ、ミコヤン、A. M. パンクラートヴァ（『歴史の諸問題』編集長、党中央委員）の3人だった。

まず大会初日（2/14）の党中央委員会報告のなかで、フルシチョフ（党第一書記、首相）は、1938年成立の『小教程』がその後の党の歴史的発展をカバーしていないうえに、党幹部の宣伝・教育資料としても失格であるため、新党史の作製が必要となったことを、つぎのように指摘した。

「過去17年間、われわれの宣伝の基礎にすえられていたのは、主として『小教程』党史だった。わが党の名誉ある党史は今後も幹部要員教育のもっとも重要な典拠のひとつたねばならぬ。それ故に、党の世界史的意義を有する、共産主義をめざす試みが科学的に総合され、今日までの叙述をカバーする、歴史的事実にもとづいた、一般向き党史教科書を創る必要がある。」⁴²⁾

大会3日目（2/16）、ミコヤン（第一副首相、当時フルシチョフに次ぐ No. 2 の実力者）も、同様の主旨をさらに敷衍した⁴³⁾。すなわち、「わが党とソビエト社会の歴史の分野における学問的アルバイトが、恐らく、わがイデオロギー活動のなかでもっとも遅れた部分である」と診断したのち、ミコヤンは、「われわれの宣伝活動（傍点一原文）が思わしくない状態にある」主な理由を「マルクス・レーニン主義をひとえに『小教程』党史にのみ準拠して勉強している」ことに求め、「これは、もちろん、誤っている」と断言した。

39) 会議の様子は、『歴史の諸問題』誌二月号に掲載された。“Конференция читателей журнала «Вопросы Истории», Вопросы Истории. (№2, 1956), стр. 199-213.

40) Там же, стр. 202.

41) Там же, стр. 212.

42) XX Съезд Коммунистической партии Советского Союза (14-25 февраля 1956 года) : Стенографический отчет. Том I. (Москва: Госполитиздат, 1956), стр. 114.

43) Там же. стр. 325.

党史と政権

そして、「現存の『小教程』党史がわれわれを満足させえない」ならば、わが国の歴史家たちの任務は「『小教程』に記述された多くの事実や事件に、レーニン主義の見地から、よりよい照明を与える」よう努力することであると結論した。このように最高政策決定者の爆弾的発言に刺戟され、1月の歴史家協議会では二股膏藥的な立場をとっていたパンクラートヴァも⁴⁴⁾、ついに大会7日目(2/20)、明瞭なる『小教程』批判派に態度を踏みきった。女史は、「現在、党史にかんする真面目な学問的労作をほとんど発見できず」、「わが偉大な共産党の歴史研究を真に学問的な高みにひき上げるという任務が、まったく焦眉の急に迫っている」が、その主たる理由は「進歩的学問にとって障害物となる個人崇拜の影響がこの分野にとくに強く現れている」からだと説明した⁴⁵⁾。さらに、彼女は、この個人崇拜が一種の明らかな英雄史観となって『小教程』を貫流しているが、それは唯物史観ならびに人民大衆の役割を重視するマルクス・レーニン主義と相容れないと非難した。

「周知のごとく、マルクス・レーニン主義は個人崇拜を、唯物史観からの重大かつ有害な逸脱のひとつ、観念論の広汎にゆきわたった形態のひとつ、とみなしてきた。《英雄と民衆》の理論は、大衆の創造的役割の過小評価と結びついている。

歴史の真の創造者および原動力としての人民大衆の決定的役割にかんするレーニンの教えを実現しつつある中央委員会は、とうぜん個人崇拜にたいする闘争を要求した。」⁴⁶⁾

ミコヤンとパンクラートヴァとの間には一種の連繋があった模様で、両者の発言の文言にもいちぢるしい類似性がみられる。また、両者はともにはげしい『小教程』の批判をおこなったにもかかわらず、その実質的製作者たるスターリンの名前に直接言及していない点も符合を一にしている。正面切ってスターリンを名指しで非難し『スターリン小教程』批判をおこなったのは、やはり大会最終日(2/24-25)のフルシチョフ秘密演説であった。既出と一部重複するが、関係部分をあえて引用する。

「『全連邦共産党(ボ)小教程』は、個人崇拜に満ちている…。スターリンがこの書物の著者であるとするならば、なぜ彼は自己の人格をそれほど賞め讃え、わが光栄ある共産党の10月革命以後の歴史的な全時期をひとえに「スターリンの天才」の行動に変形せしめる必要があったのか？……この本はソ連の社会主義的変移、社会主義社会の建設、工業化と集団化における党の努力、ならびにその他レーニンによって示された途を逸脱することなく歩んできた党のとった処置にみられる党の努力を正しく反映しているだろうか？ この書物は主としてスターリン、彼の演説、彼の報告について語っている。すべてのことをいささかの例外もなく、彼の名前と結びつけている。そして、スターリン自身が『全連邦共産党(ボ)小教程』を自ら書いたと主張するのは、少くとも驚くべきこと

44) ソビエト歴史学の指導的地位にある彼女が、党路線の変更に迎合して絶えず自己の見解を変えたことにかんし、Alexander Dallin, "Recent Soviet Historiography," Abraham Brumberg (ed.), *Russia under Khrushchev*. (New York: Frederick A. Praeger, 1962), p. 481; Yakobson, *op. cit.*, p. 127 参照。

45) *XX Съезд Коммунистической партии Советского Союза*. Том I, стр. 619.

46) *Там же*, стр. 621.

である。マルクス・レーニン主義者がこのように自分自身のことを書き、自己の人格を天に届くまで賞め讃えることができるものか。」⁴⁷⁾

そして結論として、フルシチョフは、「非常に近い将来、科学的・マルクス主義的客観性にしがって編集された真面目な党史教科書を編集することが特に必要である」⁴⁸⁾と声明した。

第20回党大会後、ソビエト歴史家たちにとってさらに不確定な混乱期が訪れた⁴⁹⁾。なぜなら、大会によって遂にスターリン批判の「パンドラの箱」が開かれたものの、それをどのていど真剣に受けとって歴史学に反映してよいものやら大いに途惑わねばならなかったからだ。M. フェインソドの比喻を借りるならば、第20回党大会は、歴史家たちを、安全な浅瀬も危険な暗礁も未発見の「海図のない海」⁵⁰⁾へ押しやった。ある歴史家は用心深く大事をとり与えられた自由の限界を教える事件をまとうとしたが、なかには新政策を額面どおり（ないし過大に）解釈して直ちに行動開始した者たちがいた。『歴史の諸問題』（科学アカデミー歴史研究所刊）に論陣をはる歴史家、なかんずく1953年半ば以来同誌の事実上の指導者となったЭ. ブルジャーロフが後者の代表である。大会1カ月後刊行の『歴史の諸問題』3月号は、（恐らくブルジャーロフ執筆の⁵¹⁾）論説において、スターリンを名ざして非難しつつ「スターリン個人崇拜が歴史的眞実の直接の歪曲を導いた」⁵²⁾として、『小教程』の詳細な批判を展開した。さらに、同論説は、1905年のメンシェヴィキの役割の歴史的再評価を促がした。「ある歴史家は、メンシェヴィキをツァーリズム専制の共犯者と描き、メンシェヴィキとポリシェヴィキとの……合同委員会の歴史を拒否している。だが、果してそのような…事実を抹殺しうるものか？」⁵³⁾同誌翌月号のブルジャーロフの論文「1917年3-4月におけるポリシェヴィキの戦術について」は、さらに、趣旨を敷衍してつぎのように述べた。

「多くの地方で、メンシェヴィキと合同した組織がつけられた。合同の趨勢の展開は、偶然ではなかった。この事実をたんにポリシェヴィキの組織的弱さのみでは説明しえない。合同組織の結成は、多くの指導的ポリシェヴィキが、当時ロシア革命の発展の基本的問題にかんする十分正確な路線をもっていなかったことを証明していた。」⁵⁴⁾

47) "Secret Speech of Khrushchev ...," p. 73.

48) *Ibid.* p. 88.

49) その後ずっとこの「不確定な過渡期」(a transitional and uncertain stage) が続行しているという解釈もなりたつだろう。Hans Rogger, "Politics, Ideology and History in the USSR: The Search for Coexistence," *Soviet Studies*. (vol. XVI, No. 3, Jan. 1965), p. 254.

50) Merle Fainsod, "Soviet Russian Historians, or the Lessons of Burdzhakov," *Encounter*. (No. 18, Mar. 1962), p. 83; "Historiography and Change," Keep (ed.), *op. cit.*, p. 21. この両論文は、ほぼ完全に重複しているので、以後、前者のみ引用することにする。

51) 多くのアイデアならびに文言が、歴史家協議会（1月）におけるブルジャーロフの発言内容と酷似しているからである。Heer, *op. cit.*, p. 80.

52) "XX съезд КПСС и задачи исследования истории партии," *Вопросы Истории*. (№ 3, март 1956), стр. 4.

53) *Там же*. стр. 7.

54) Э. Н. Бурджалов, "О тактике большевиков в марте-апреле 1917 года," *Вопросы Истории*. (№ 4, апрель 1956), стр. 39.

しかし、これは超えてはならぬ一線の侵犯を意味した。なぜなら、たとえ部分的にであれメンシェヴィキを復権・擁護することは、ボリシェヴィキ的方法が唯一の正しい途だったと説く神話を稀薄化することに連らなり、「党の不可謬性」にたいする最大の冒瀆行為⁵⁵⁾だからである。

がんらい、第20回大会におけるフルシチョフやミコヤンによるスターリン批判の一環としての歴史の書換え要求は、歴史的正確性を追い求めての高邁な学問的関心から発した⁵⁶⁾のではなく、きわめて実務的かつ政治的な動機にもとづくものだった。スターリン批判は、スターリン時代に形成された生活の全面におよぶ凍結——沈滞、無気力、非能率——状態から脱するためには、ドラスチックな価値転換によるショック療法より他はないと直観的に悟ったフルシチョフの危険な(—だが、そうしないことは一層危険だった。!)賭けであった。党史もまた従来の独占に由来する弊害——現実遊離、ステレオタイプ、退屈なお題目の反覆のため、革命の *élan* をかきたてるより冷却する方に役立っていた⁵⁷⁾——をふり捨て、懐疑的でソフィスティケートされた若い世代に訴えるよう工夫をこらす必要があった。党史改変の意図は、これ以上でも以下でもなかった。換言すれば、20回党大会が変更したのは、「統制の緩和ではなく、むしろ党路線の変化」⁵⁸⁾だった。その意味で、「党の不可謬性」はいぜんとして大前提であるのみならず、「党」こそが、スターリンという古い偶像の破壊のあとその身代りとなりうる唯一のものとして、以前にもまして強化されねばならなかったのである。したがって、遅かれ早かれ非スターリン化⁵⁹⁾に自ら制約のあることが知らしめなければならなかったのであるが、国の内外におけるその思わぬ^{リバーカブション}はね返り(とくに東欧動乱)に遭遇したフルシチョフ指導部は、秘密演説以来わずか四カ月経ぬうちに手綱の引締めめに転じ、それは当然歴史学の分野にも及んだのである。

1956年6月末と推定される⁶⁰⁾この政策転換は、歴史学者たちに「段階的に (step by step)」⁶¹⁾に知らされた。つまり、はじめ口頭による警告、それが効を奏せず内外状勢がさ

55) Keep. (ed), *op. cit.*, p. 35, 36; Heer, *op. cit.*, p. 93.

56) ミコヤンは、第20回大会における演説中で、つぎのような学問の本質論を展開して拍手を浴びていた。「わが国の理論家の大多数は、使い古された引用句、公式、命題を色々なまぜて反覆、パラフレイズすることに専念している。(だが)創造なしに、なんの学問か? それはスコラ主義、学校の練習であって、学問ではない。なぜなら、学問とは、なによりもまず創造であり、新しいものの造出であり、わかり切ったことの反覆ではないからである」(拍手)。XX Съезд КПСС.... Том I, стр. 327.

57) Adam B. Ulam. "Socialism in Current Soviet Historiography," Ulam. *The New Face of Soviet Totalitarianism*. (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1963), p. 155.

58) Schapiro, *op. cit.*, p. 52.

59) 「非スターリン化」は、もちろん西側の用語で、ソビエトの文献中で用いられている用語ではない。ソビエト側の「スターリン個人崇拜の批判」にほど近い。ここでは、両方を用いる。Thomas B. Larson, "What Happened to Stalin?," *Problems of Communism*. (vol. XVI, March-April 1967) p. 82.

60) 党機関誌『コムニスト』6月号上に例の「スターリンはあまりにも粗暴すぎる……」と述べた有名な「レーニンの遺言」の未公開の補遺が発表され、いぜんとして20回大会以来の非スターリン化政策が継続されていることを示したにもかかわらず(“Неопубликованные документы В. И. Ленина,” *Коммунист*. XXII, № 9, июнь 1956, стр. 18), 6月30日には、一転して本文中の中央委決議が出されたことから、政策転換の決定はこの二つの事件の短い期間に下されたと推定される。

61) Heer, *op. cit.*, p. 94.

らに緊迫したとき行政的実力手段に訴えられたのである。第一の信号は、ポズナニ暴動開始(6/28)の3日後の党中央委決議「個人崇拜の克服とその結果について」だった。非スターリン化にかんする唯一の公式見解発表であるこの1956年6月30日付決議は、スターリンによる「許しがたい誤り」を彼の個人的資質と当時の具体的歴史状況の結合によってもたらされたものと説明し、それが現在では清算され、将来二度と繰り返されない類のものという立場をとった⁶²⁾。7月には、党中央委の機関誌『党生活』に『歴史の諸問題』誌の最近の論調を批判する論文も登場した。即ち、E. ブガーエフ(同誌編集長、党煽動宣伝部長)は、「『小教程』が、たとえ事実上多くの誤りや不正確な点を含んでいるにせよ、その有用性において初期の教科書とは比較にならない」と名誉回復を図る一方、ブルジャロフ論文がレーニンの教えた「客観性を忘れ」、「厳しい科学的アプローチを採っていない」と攻撃した⁶³⁾。ところが、この段階においてまだこれら党とその代弁者による警告の意味に気づかなかつた(または気づかないふりをした)『歴史の諸問題』編集部は、逆にブルジャロフ弁護に精力を集中した。たとえば、同誌7月号は、「ブガーエフ論文は、その本質において、すべてを旧態依然に止めおくことを狙っている」が、「第20回党大会は、マルクス・レーニン主義歴史学のみのものである展開のための明確なプログラムを与えた」のであり、「ソビエト歴史学者は、首尾一貫、毅然として、このプログラムを遂行してゆく」との決意を述べた⁶⁴⁾。ブルジャロフも負けずに、同誌8月号に「再び1917年3-4月のポリシェヴィキの戦術について」を書き⁶⁵⁾、自己の見解をさらに敷衍した。しかし10-11月ポーランドおよびハンガリー動乱が激化したとき、党はさらに一層の引締め警告をおこなう必要を感じた。すなわち、党の日刊機関紙『プラウダ』(11/20)は、B. スミルノフ(モスクワ大学ソ連共産党史講座助教授)の同編集部宛の手紙を掲載したが、その主旨は、『歴史の諸問題』の或る論文が「個人崇拜の結果を批判するふりをして」、その実「党によって決定済みの問題を再検討し、議論の余地ない真理に疑問符を投げかけようと試みている」⁶⁶⁾というものだった。また、党中央委員会は、年明けの1月12日突如、同委員会付属マルクス・レーニン主義研究所から新雑誌『ソ連共産党の諸問題』(隔月刊、1963年1月から月刊)を創刊すると発表した⁶⁷⁾が、これは党史にかんするかぎりその独占的管轄を従来の科学アカデミー歴史研究所発行の『歴史の諸問題』から剝奪することを意味し

62) “О преодолении культа личности и его последствий,” *КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК.* (часть IV). (Москва: Госполитиздат, 1960), стр. 222-239.

63) E. Бугаев, “Когда утрачивается научный подход,” *Партийная жизнь.* (№14, 1956), стр. 66, 69.

64) “О статье тов. Е. Бугаева,” *Вопросы Истории.* (№ 7, июль 1956), стр. 222.

65) Э. Н. Бурджалов, “Еще о тактике большевиков в марте-апреле 1917 года,” *Вопросы Истории.* (№ 8, август 1956), стр. 109-114.

66) В. Смирнов, “Неправильное освещение важного вопроса,” *Правда.* (20 ноября 1956), стр. 2.

67) *Справочник партийного работника.* (издание первое.) (Москва: Политиздат, 1957), стр. 372. 初代編集長は、マルクス・レーニン主義研究所長 Г. Д. Овби-Чикин (Обичкин) であるが、彼は『歴史の諸問題』の元編集員時代、パンクラートヴァ、ブルジャロフと「折りあいが悪かった」と推定される。Schapiro, *op. cit.*, p. 71.

た⁶⁸⁾。党による自由主義歴史家の引締め最終ラウンドは、1957年3月に訪れた⁶⁹⁾。すなわち、党中央委員会は、同決議「『歴史の諸問題』について」(3月7日)⁷⁰⁾の中で、『歴史の諸問題』編集部の「許しがたい誤り」を理論的に糾弾する⁷¹⁾とともに、同編集部をほぼ完全に改組する⁷²⁾という実際的な制裁手段に訴えたのである。編集長パンクラートヴァー一譴責処分⁷³⁾、編集員11名中ブルジャーロフを含む8名一罷免の現実に直面し、さしもの『歴史の諸問題』⁷⁴⁾も、方向転換せざるをえなかった⁷⁵⁾。

かくして、第20回党大会にはじまるソ連史上未曾有の「歴史学のルネッサンス」は終焉した。もちろん、「ソビエト歴史学の暗黒期」⁷⁶⁾たるスターリン期への逆戻りを意味するのではない。数々の最早や取消しえない改善が齎らされていた⁷⁷⁾。だが、それは百花斎放ではなく、あくまでコントロールされた枠内での自由を意味した。では、一体ブルジャーロフあるいは「ブルジャーロフ事件」⁷⁸⁾の意味はなんだったのか？ フェインソドは、論文「ブ

- 68) クレムリノロジスト B. ニコラエフスキーは、権力争いの見地からこの1956-57年の「ブルジャーロフ事件」を眺めようとする。つまり、彼によれば、それは、まず、連邦科学アカデミー付属歴史学研究所 vs. 党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所の権力争いである。つぎに、『歴史の諸問題』 vs. 『党生活』の対立は、党中央委員会書記局内の二つの部門、即ち高等教育科学部(第20回党大会までパンクラートヴァーがとりしきっていた) vs. 幹部行政部(ロシア共和国モスクワ・ビューローのフルシチョフ代理 A. B. アリストフ支配下)の権力争いとして理解する必要がある、と。Keep. (ed.), *op. cit.*, p. 40. なお、このようなソ連邦における歴史家とかれらを監督・管轄する公式・非公式の組織機関とそのコントロール方法にかんしては、Heer, pp. 34-58 参照。
- 69) 党による歴史家の引締め処理の主要な内外の背景としては、①1956年6月—ボズナニ事件、②同年11月—ポーランド、ハンガリー動乱、があげられるが、この③1957年3月のばあいは、特定の政治的危機よりもむしろそれまでの警告を無視しつづける一部歴史家にたいする「蓄積された怒り」だったと推定される。Heer, *op. cit.*, p. 94.
- 70) *Справочник партийного работника. (издание первое)* (1957), стр. 381-2.
- 71) この決議は未公開(当時)だったが、同様の趣旨は、『コムニスト』3月号論説中にくり返された。“Строго соблюдать ленинский принцип партийности в исторической науке,” *Коммунист*. (XXXIII, № 4, март 1957), стр. 17-29.
- 72) この改組が中央委員会書記局によって決定されるまでの経過は、クレムリン内のデシジョン・メイキングの興味ある一例として参考に値する。M. フェインソド教授紹介・引用のイタリア共産党指導者の報告 (*Problemi e realtà dell' URSS*. Roma: Editori Riunite, 1958, p. 75) 参照。Merle Fainsod, *How Russia is Ruled (revised edition)*. (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1963), p. 339.
- 73) パンクラートヴァーは、ほどなく失意のうちに死亡した(5/25)。*Правда*. (27 мая 1957), стр. 3; *Вопросы Истории*. (№ 4, апрель 1957), стр. 214-216.
- 74) ソビエト歴史学の主要誌たる『歴史の諸問題』は、その時々々の党の対歴史学政策の変化にしたがって、たびたび改組、ときには誌名すら(『階級闘争』1931→『歴史雑誌』1937→『歴史の諸問題』1945→)変更してきており、今回(1957年3月)の受難(?)がなにもはじめてでない。このことにつき示唆的なのは Yakobson, *op. cit.*, pp. 123-133.
- 75) 新編集部下の同誌3月号は、「歴史科学におけるレーニン主義的党派性をめざして！」と題する論説をかまげ、メンシェヴィキとボリシェヴィキとの基本的相違を強調するとともに、スターリンを、数々の誤りにもかかわらず、「党の敵の曝露と根絶、党の大義の勝利をめざす闘いにおいて、もっとも大きな役割を演じた、卓越せるマルクス・レーニン主義者」と規定した。“За ленинскую партийность в исторической науке!”, *Вопросы Истории*. (№ 3, март 1957), стр. 10.
- 76) Ulam. *op. cit.*, p. 177.
- 77) たとえば、キープは、研究の①範囲、②資料、③機関、④交流の拡大を Keep. (ed.), pp. 11-12, フェインソドも、①アルヒーフ解禁、②国際的接触の増大、③新雑誌の発行、などを挙げている。Fainsod, “Soviet Russian Historians,” pp. 86-87. Dallin, *op. cit.*, pp. 783-4 も参照。
- 78) この事件のもっとも秀れた解説は、既出の Fainsod, “Soviet Russian Historians,”; “Historiography and Change”; Heer, *op. cit.*, のほか、Konstantin F. Sheppa, *Russian Historians and the Soviet State*. (New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press), pp. 361-382.

ルジャーロフの教訓」の中で、「過渡期は、歴史家にとっても、危機である。不確定なトランペットが吹かれるとき、きまってその調子を把え損う歴史家が幾人かでてくる」⁷⁹⁾と書いているが、その「調子を把え損った歴史家」がブルジャーロフを指すことに異論はない。たしかに、ブルジャーロフは自らをとり巻く政治的気流の変化を誤算した頑固な非政治的人間の典型である。それ故、かようなソ連社会における歴史と政治のリアリズムの観点からは、1956-7年の「ブルジャーロフ事件」は、紛れもなく歴史の徒花であり、悲劇と呼んでもさしつかえなからう。だが、他方、彼がたんなる機会便乗を企らむ「野心的な学術役人」(A. ユーラム)⁸⁰⁾でなく、自己の学問的信条に忠実に行動する歴史家であることを、その後の経歴(とくに1962年12月開催の全連邦歴史家協議会の席上、彼は自己の1956-7年の見解を変更していないことを立証した⁸¹⁾)で証明し、さらに彼の見解の少なからぬ部分がソビエト歴史学に影響を与え包摂されていきつつある⁸²⁾事実を識るとき、彼および彼の事件の真の評価は未だ時機尚早であるというべきであろう。

それはともかく、「混乱が収まり、新しい主人の歌が高らか且つ明瞭に響くと、地固めの時期が開始され、歴史家はふたたび行進しはじめる」(M. フェインソド)⁸³⁾。1957年7月創刊された新雑誌『ソ連共産党の諸問題』は、それまで『歴史の諸問題』が担当していた党史問題を決して行きすぎない形で受け継ごうとした。創刊第1号の編集部の言葉は、「個人崇拜論争にかこつけて、スターリン著作中のもっとも重大なものを忘れざる弊害の除去」⁸⁴⁾を力説した。そして我々にとって注意すべきは、このような「スターリン批判」に腰くだけとなった『ソ連共産党史の諸問題』に爾後分載されたソ連共産党史⁸⁵⁾がそっくりそのまま、つぎに解説する1959年の単行本『ソ連共産党史』となっていた事実である。

(3) 『ソ連共産党史』—1959年—

『スターリン小教程』の「誤りと欠陥を克服」し、「新しい文献を利用し新しい研究課題を検討」した「最初の集大成」⁸⁶⁾としての『ソ連共産党史』⁸⁷⁾—以後『フルシチョフ第一版』ないし『五九年版』などと略称—が、1959年6月刊行された。執筆者は、『小教程』と異なり、明記され、B. H. ポノマリョフをリーダーとする11名の科学アカデミー正会

79) Fainsod. "Soviet Russian Historians" p. 82.

80) Keep. (ed.), *op. cit.*, p. 38. フェインソドらの反論, 同書 p. 39, 40, 41 参照。

81) *Всесоюзное совещание о мерах улучшения подготовки научно-педагогических кадров по историческим наукам (18-21 декабря 1962 г.)*, (Москва: Издательство «Наука», 1964), стр.367-70. 当時ブルジャーロフは、モスクワのレーニン教育研究所勤務だった。
Там же, стр. 367.

82) Martin Dewhurst, "L'Historiographie Soviétique récente de l'histoire de la Révolution," *Cahiers du Monde Russe et Soviétique*. (Vol. V, No. 4, 1964), pp. 549-566.

83) Fainsod. "Soviet Russian Historians," p. 82.

84) "От редакции," *Вопросы Истории КПСС*. (№ 1, 1957), стр. 12.

85) *Вопросы Истории КПСС*. (№ 5, 1958), стр. 18-96; (№ 6, 1958), стр. 16-67; (№ 1, 1959), стр. 71-126; (№ 2, 1959), стр. 129-153.

86) "К новому подъему историко-партийной науки," *Вопросы Истории КПСС*. (№ 5, 1960), стр. 14.

87) *История коммунистической партии Советского Союза* (Москва: Госполитиздат, 1959). 以下 *История КПСС* (1959) と略す。

員からなる特別に任命された執筆団である⁸⁸⁾。題名は、「^{コース}教程」(курс)でなく、「^{テキストブック}教科書」(учебник)となっている。出版のタイミングは、スターリン死後6年目⁸⁹⁾で、フルシチョフがマレンコフらの政敵を打倒し、一応自己のまわりに権力を集中した時点といえる。分量は、『小教程』(352 p.)の2倍以上(742 p.)であるが、これは対象期間が20年も増大した事実にもとづく当然の結果といえる。出版部数は、初版75万⁹⁰⁾、総計500万(1962年現在)⁹¹⁾。2-3種類の翻訳⁹²⁾がある。

つぎに内容上の特色⁹³⁾に移る。まず第一に、『小教程』からのもっとも劇的な修正点は、いうまでもなくスターリンである。スターリンは、半ば神にも等しい地位から一挙に功罪半ばする、さして重要でない人物に転落した。次章で詳述するが、スターリンは、たとえば、1917年のはじめ臨時政府にたいし「非常に誤った(ошибочная)立場をとり」⁹⁴⁾、レーニンの遺書のなかで「その欠陥(недостатки)が批判され」⁹⁵⁾、国家の強化につれ階級闘争がますます激化するという「誤った(ошибочный)テーゼ」⁹⁶⁾により大量弾圧を根拠づけ、「戦術的な誤算(просчет)」によって対独緒戦の敗北を招き⁹⁷⁾、「自己の個人崇拜を助成した」⁹⁸⁾、等々と描かれている。他方、スターリンは「成功による眩惑」を書いて「コルホーズ運動で犯された誤りを是正(исправление)しよう」⁹⁹⁾とし、粛清の第一の責任はむしろ「エジョフとベリア」にあり¹⁰⁰⁾、スターリンは「敵の陰謀を警戒する必要を正しく(справедливо)強調した」¹⁰¹⁾、等々と、スターリンの一定の功績も評価されている。

では、『五九年版』党史において、フルシチョフが曾つてのスターリンの地位を埋めているかと云えば、答は大部分において「ノー」である。なぜなら、『五九年版』においてフルシチョフは『小教程』におけるスターリンの如き「主人公」としては決して描かれていないからである。745ページからなる『五九年版』においてフルシチョフの名が初登場するのは、ようやく314ページになってからで、しかも他の23名のポリシェヴィキたちに

88) たゞし、フルシチョフ、彼の煽動・宣伝担当官のスースロフが全般的監督をおこなったといわれる。

89) レーニン死後、スターリン死後、フルシチョフ失脚後6年目の時点におけるそれぞれの後継者の権力状況についての、R. レーヴェンタールの興味ある比較として、Richard Lowenthal, "Moscow Parley: The Return of Stalin's Mustache on a Higher Level," *The New York Times*, (Mar. 28, 1971), p. 8 参照。

90) C. E. Black. (ed.), *Rewriting Russian History*. (New York: Frederick A. Praeger, 1956), p. 31.

91) *Советская Историческая Энциклопедия*. (Москва: Издательство «Советская Энциклопедия, 1965), Том. 7, стр. 718.

92) 日本共産党中央委員会宣伝教育部訳『ソ連邦共産党史』3巻(東京:日本共産党中央委員会宣伝教育部, 1965), その他。

93) すぐれた紹介として、鳥山成人教授「新しい『ソ連邦共産党史』について」、『歴史評論』(東京:春秋社, 1960年3月号), pp. 2-8 参照。

94) *История КПСС* (1959), стр. 201.

95) *Там же*. стр. 362-363.

96) *Там же*. стр. 484.

97) *Там же*. стр. 519.

98) *Там же*. стр. 483,

99) *Там же*. стр. 424.

100) *Там же*. стр. 484.

101) *Там же*. стр. 483.

混ってのアルファベット連記方式第18位（スターリンは第12位）を占めているにすぎない。ようやくフルシチョフが華々しく描かれはじめるのは、600ページを過ぎた第19回党大会（1952）あたりからである。このような《出場率》では、全編フルシチョフを「主人公」とする党史とはとうていいいがないのである。

《常時出場》の「傑出した活動家、深い理論家、輝かしいオルガナイザー」¹⁰²⁾の別格官僚大社たるレーニンを一応別にして、スターリンもフルシチョフも「英雄」として記述されていないとすれば、そのかわりに『五九年版』の中心に据えられているのは、誰か？『五九年版』党史は、個人崇拜の弊害を戒しめる風潮にも合致して、いわば特定個人不在の歴史であり、強いていうならば、人民大衆、国家、政府、なにかなく「党」が歴史の「主人公」の地位に坐っている。つまり具体的・可視的な特定人物でなく、抽象的・不可視的な存在としての《党》を主体として前面に押し出すのが、『五九年版』の基調と考えられるのである。そして、明らかにそのような設定は、当時、過去の責任を免除し現在の支配を強化するのに打ってつけの工夫であった。つまり、個人崇拜から生れた数々の誤りや歪曲にもかかわらず、「党はつねに正しく、また党のみが正しかった」ことを主張せしめ、さらにこの「党」の不可謬性の錦の御旗にかくれて「党」を権力基盤とする特定グループ（＝フルシチョフ一派）の権威を正当化せしめたのである。

では、「悪玉」はだれか？ 一説によれば、『五九年版』において、「悪玉」もまた特定個人でなく、メンシェヴィキという集団に変わっているという。つまり、『小教程』における「スターリン vs. トロツキー」に相当する基本的対抗図式は、『五九年版』では「党 vs. メンシェヴィキ」となる¹⁰³⁾。ここで、「党」とはポリシェヴィキ党にほかならないから、この図式は「ポリシェヴィキ vs. メンシェヴィキ」となり、客観的にもソ連共産党の権力闘争史の真髄にふれた叙述方法と考えられる。というのは、このばあい、「メンシェヴィキ」を単なる狭義のそれ自体と解さず、R. ダニエルスが『革命の良心』のなかで指摘したように¹⁰⁴⁾もっと広義に受けとる。即ち、あまりにも正統なマルクス主義者であったが故に却ってレーニン麾下のポリシェヴィキとの権力闘争に敗れ異端のレッテルを貼られた、すべての反ポリシェヴィキたち（＝社会革命党、メンシェヴィキ、左翼共産主義者、労働者反対派、民主的中央集権派、トロツキスト、等々）の総合体に対する象徴的呼称と解する。そうすると、『五九年版』党史は、まさしく「正統 vs. 異端」の歴史となり、何人も異論をさしはさみえなくなるからである。

なお、『五九年版』には、この「メンシェヴィキ」のほか、個別的な非難の対象も登場する。新しい「贖罪の羊」^{スケープ・ゴート}第一号は、ベリア。ベリアは、スターリンの蔭でスターリンを唆かした「ペテン師」¹⁰⁵⁾、「政治的冒険者」¹⁰⁶⁾、「党と国民の呪うべき敵」¹⁰⁷⁾と描かれて

102) Там же. стр. 32.

103) Schapiro, *op. cit.*, p. 85.

104) Robert Daniels, *The Conscience of the Revolution: Communist Opposition in Soviet Russia*. (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1960), pp. 409-410; 国際社会主義運動研究会訳『ロシア共産党党内闘争史』（東京：現代思潮社，1967），pp. 327-328.

105) *История КПСС* (1959), стр. 484.

106) Там же. стр. 484. 628.

107) Там же. стр. 628.

党史と政権

いる。つぎは、1957年7月フルシチョフとの権力闘争に敗れた「反党グループ」のマレンコフ、カガノヴィチ、モロトフ、シェピーロフ、ベルヴェヒン、サブーロフ。そして、この権力闘争過程でフルシチョフに利用された後棄てられたジューコフとブルガーニンである。彼らは、そろって、その活動と業績を故意に抹殺され¹⁰⁸⁾、「レーニンの方針に反対する分派的・反党的な活動に従事した」¹⁰⁹⁾者と描かれている。

『五九年版』党史は末尾に近づくにつれ、フルシチョフ色を急速に濃厚にし、最後の二章においてそれを爆発的なまでに高めている。たとえば、〈最終章〉と〈結論〉におけるフルシチョフの演説からの引用は、『小教程』のスターリンに決して遜色がない。即ち、『小教程』の〈最終章〉の最後の引用文はスターリンであるが¹¹⁰⁾、『五九年版』の〈最終章〉はフルシチョフの引用文そのもので終わっている¹¹¹⁾。『小教程』の〈結論〉がスターリンの引用文そのもので終わっているのにたいし¹¹²⁾、『五九年版』はマルクスとレーニンからの引用で終わっている¹¹³⁾ものの、『五九年版』の〈結論〉全体にわたり、レーニン(10回)とならび引用されているのは、フルシチョフ(4回)ただ一人であるという状況である¹¹⁴⁾。

『五九年版』の「主人公」は決してフルシチョフではない。しかし、以上の如き『五九年版』の内容上の特色、すなわち①「党」の高揚、②「反党グループ」の攻撃、③最終部分におけるフルシチョフ中心の叙述——これらすべてを総合してみると、やはりフルシチョフ個人権力の正当化という一点に収斂している事実を承認せざるをえない。『小教程』のスターリンのばあいほど直接的あからさまではないが、『五九年版』もまた時の支配政権の正統性^{レジティミテート} 確立のための手段的性格を担っている点に変わりはない。ところが、かような目的からみて、『五九年版』は未だ不十分であり、暫定版としての資格しか認められぬ代物だった。

『五九年版』党史が当初から過渡的使命を帯びていたことを示す二、三の事例がある。まず出版当時、『小教程』刊行にともなったような鳴りもの入りの華やかさが欠けていた。のみならず、『コムニスト』(1959年7月)誌上の書評は、『五九年版』党史の「饒舌な記述」、「理論的概活の欠如」すら指摘した¹¹⁵⁾。また、党中央委決議「現在の状態における党宣伝の課題について」(1960年1月9日)は、「『小教程』を中心として宣伝を推進する過去のアブノーマルな状態が除去された」¹¹⁶⁾と述べたが、その代りとしてつくられたはずの『五九年版』に一言も触れなかった¹¹⁷⁾。同様に、1960年春の高等教育施設における党史プロ

108) 一例をあげると、第19回党大会の記述のところでは彼らの演じた役割り、すなわちモロトフ—開會演説、マレンコフ—主要政治報告、ベリヤー—民族問題報告、サブーロフ—第五次五年計画報告、フルシチョフ、ブルガーニン、ミコヤン—党規約改正報告、カガノヴィチ—綱領改正報告が完全に抹殺され、「フルシチョフが党規約報告をした」とのみ書かれている。Там же. стр. 608.

109) Там же. стр. 654-657.

110) Краткий курс. стр. 336.

111) История КПСС (1959), стр. 717.

112) Краткий курс. стр. 346.

113) История КПСС (1959), стр. 736.

114) История КПСС (1959), стр. 724, 730.

115) А. Березкин, С. Мезенуев, “Героическая история Коммунистической партии Советского Союза (К выходу в свет нового учебника по истории КПСС),” Коммунист. (XXXVI, № 10, июль 1959), стр. 65.

116) “О задачах партийной пропаганды в современных условиях,” КПСС в резолюциях... (часть IV), стр. 592.

117) Там же. стр. 590-610.

グラムの改正教授要綱も『五九年版』を公式テキストに指定しなかった¹¹⁸⁾。さらに、『ソ連共産党史の諸問題』誌に『五九年版』と抵触する内容の新しいドキュメントが掲載されつづけたが、これは、少くとも『小教程』刊行後はその内容と矛盾する一切の歴史書や資料の発表・出版を厳禁して党史の独占的権威を擁護しようとした態度と異なるものだった。

(4) 『ソ連共産党史 (追補第二版)』—1962年—

1962年11月、改訂版としての『ソ連共産党史 (追補第二版)』—以下、『フルシチョフ第二版』ないし『六二年版』と略す—が出版された¹¹⁹⁾。『五九年版』と比べ、執筆陣はわずか一名の変更。分量は、新たに一章を加え、41ページ増の784ページ。これはその後3年間の記録をカバーする必要にもとづく。発行部数は100万¹²⁰⁾。日本訳はない¹²¹⁾。

『五九年版』と『六二年版』との差異は、たんなるページ数の量的増大にとどまるものではない。加うるに、三年間の政治＝イデオロギー的気候の変化を反映した質的な修正が全編にほどこされ、むしろこの方がずっと注目に値するのである。そして、1959-62年の政治諸状況のなかでクライマックスをなすのは、1961年10月開催の第22回党大会¹²²⁾であるが、それは次の二つの重要課題の挙行舞台を提供したからである。

一は、フルシチョフによる第二次「スターリン化」およびそれに名を借りた政敵の根絶作業であった。フルシチョフは、既に彼が一度(1957年7月)打倒済みの「反党グループ」の存在をあらためて国民に公表した。その動機は、もちろん彼らの抬頭にはなく(——フルシチョフはそう見せかけようと装ったが——)¹²³⁾、彼らの完敗の事実の確認と利用とにあった。フルシチョフの腹心 A. H. シェレーピン自身の大会中のつぎの発言が、この意図を十二分に物語っている。

「われわれが大会で反党グループについて語るのは、それが党にとり現在なんらかの危険を提供するからではない。否、反党グループ参加者は、なんらかの危険どころか、今や一片の危険すらも提供しない政治的屍^{しかばね}である。われわれがこれらのグループについて

118) B. V. Гаубих, “Новое издание вузовских программ по истории КПСС,” *Вопросы Истории КПСС*. (№ 5, 1960), стр. 227-9.

119) *История Коммунистической партии Советского Союза (издание второе, дополненное)*. (Москва: Госполитиздат, 1962) —以下、*История КПСС (1962)* と略す。

120) “Новое издание «Истории Коммунистической партии Советского Союза»,” (ТАСС) *Правда*. (10 ноября 1962), стр. 2.

121) とくに『五九年版』と比較した数少ない貴重な紹介として、秦正流「書きかえられたソ連共産党史」, 同『モスクワ一五〇〇日』, (東京: 朝日新聞社, 1964), pp. 116-119 参照。

122) 第22回党大会の解説としては、Merle Fainsol, “The 22nd Party Congress,” *Problems of Communism*. (vol. 1, No. 6, Nov.-Dec. 1961), Special Supplement, i-xi; Adam B. Ulam “Khrushchev and Boccaccio,” *The New Face of Soviet Totalitarianism*, pp. 179-217 が優れている。

123) たとえば、フルシチョフは、第21回党大会の閉会演説中で、自己の身に襲いかゝる危険にもめげず自分がいかに反党グループ壊滅の困難性と斗っているかを、次のように説明した。「中央委幹部会のなかに、権力の乱用、まさに大衆的抑圧の罪をもつ人々自身が含まれている時にかような問題を決定することがいかに困難か想像できるだろう。……彼ら(=「反党グループ」派閥主義者)は、私がこれらの問題を提起する義務を負っている限り……中央委第一書記としての私にたいして砲火を集中させたのだ。」*XXII Съезд Коммунистической партии советского союза. Стенографический отчет*. (Москва: Госполитиздат, 1962), Том II, стр. 584-5.

語るのは、かれらの本当の顔をもう一度曝露し、かれらがまったくとるに足らぬ存在たることをもう一度強調せんがためである。」¹²⁴⁾ (傍点—木村)

つまり、スターリンによる30年代の粛清とまったく同様、反対派から抵抗のためのいかなる潜在力(殉教者になる可能性すら含む)を奪わずにはおかない独裁の強化に必要な一過程だった。ともかく、かくてスターリニストにたいする「取消し不能の永遠の訣別」¹²⁵⁾が宣言された。

二は、『新共産党綱領』の発表だった。フルシチョフの権力が確立するにつれ、「『フルシチョフ主義』とは呼びえない」(I. ドイツチャー)¹²⁶⁾までも「フルシチョフ路線」と名づけられるものがおのづから形成されてきた。それは、一言で「グラシ(=ハンガリーの肉シチュー料理)共産主義」のニックネームを奉られる、つぎの内容をもっていた¹²⁷⁾。

① 物質的豊かさこそが、共産主義の不可欠要件ないし最大目標そのものである。② それは、ソ連では、従来説かれたごとく遠い未来でなく、近い将来に実現可能であり、また実現されねばならぬ。③ その方法としては、人間労働の生産性向上が最重要で、④ ソビエト国民の物質的関心の刺戟という梃子がフルに強化・活用されねばならぬ。そして、このようなフルシチョフの大構想の文章の結晶化が、『新党綱領』に他ならなかった。つまり、この「近づきつつある共産主義の、近似的でなく完全に精確で科学的な未来図を与える」(Л. イリイチョフ)¹²⁸⁾ことを豪語する『綱領』中において、上記のような方式で共産主義の物質的・技術的基盤が「アメリカに追いつき追いこす」形で20年間に形成され、1980年にはソビエト社会が共産主義の入口にまで到達することが約束されたのである。

以上のごとき、一方におけるスターリン的過去からの訣別、他方におけるバラ色の共産主義的未来の提示——この二つの課題遂行を通じ、フルシチョフが狙ったのは、現政権がソ連史において新時代を劃する体制であるとのイメージの演出であり、さらにその路線の担当推進者としての彼自身のイメージ・アップに外ならなかった。そして、この企ては、見事功を奏したといわねばならない。なぜなら、第22回大会開催中に、フルシチョフの地位は挑戦不可能なまでに高まり、彼に独占的に集中した讃辞は、同大会がまさに否認したはずのスターリン個人崇拜をほうふつとさせるほどのものだったからである¹²⁹⁾。

124) Там же. Том II, стр. 405-406. 『ブラウダ』(1961年11月21日)の一論文も述べた。「ある者は問う。なぜ党は、第22回大会で、第20回大会で批判された個人崇拜の問題にたち歸るのか…? と。…第22回大会は、わが党において個人崇拜の時期の背徳的な形式と方法にたいし、取消し不能の永遠の訣別がなされたことを一日瞭然にしめすものである」。“XXII Съезд КПСС ликвидации последствий культа личности,” *Правда*. (21 ноября 1961), стр. 2.

125) Там же.

126) Isaac Deutscher, “The Failure of Khrushchevism,” *Ironies of History: Essays on Contemporary Communism*. (London: Oxford University Press, 1966), p. 121.

127) 詳しくは、木村汎「移行期としてのフルシチョフ期—現実主義とユートピアニズムとの混淆—(一)」、『神戸学院法学』(第1巻, 第1号, 1970年3月), pp. 124-143 参照。

128) Л. Ильичев, “Теория научного коммунизма в действии,” *Коммунист*. (XXXVIII, № 13, сентябрь 1961), стр. 10.

129) たとえば、ブレジネフ(当時最高会議幹部会議長)によって述べられたフルシチョフ賞讃の言葉は、その後の歴史を知る者にとりて信じがたいほど熱烈なものだった。「曰く、「国家と党の傑出した活動家ニキタ・セルゲーエヴィチ・フルシチョフ(嵐のように長くつづく拍手)。その無限のユ

ともかく、上述の三つの契機が『六二年版』党史の中にもちこまれた¹³⁰⁾。第一は、スターリン批判の徹底化である。『五九年版』に残っていたスターリンの名前や引用文がさらに削られ、事実上すべての積極的な文章が消滅した。逆に、スターリンを非難する文章が添加・明記された。後に(III)詳述するが、たとえば、「農民の私的小規模経営にたいする愛着を過少評価(недооценка)し」¹³¹⁾、「成功の眩惑」で卒伍を混乱させ¹³²⁾、「キエロフ虐殺を彼の気に入らぬ人々の粛清の理由として利用し」¹³³⁾、「茫然自失、不決断、緩慢のゆえに」第二次大戦初めの敗北を招いた¹³⁴⁾、等々。第二は、「共産主義への移行」というフルシチョフ的ヴィジョンの全編にわたっての散布である。その結果、一例をあげれば、従来たんに「社会主義」とのみ記されていた箇所多くは、『六二年版』において「社会主義および共産主義」(傍点一木村)と書き換えられた。最後に、フルシチョフ讃美が加わった。フルシチョフは『五九年版』においても既にスターリン以後のソ連における唯一の指導者として描かれていたが、『六二年版』においてさらに新しい功績がつけ加えられた。たとえば、フルシチョフは第二次大戦中スターリンに重大報告を行い¹³⁴⁾、スターリングラード前線の責任者として¹³⁶⁾活躍した、等々。

もしもその後フルシチョフの権力がひきつづき伸長し続けていたら、さらに第三、第四のフルシチョフ版党史が続刊されていたことだろう。しかし、二年後(1964)にフルシチョフ自身が辞職に追いやられるという政治状勢が展開したため、この『六二年版』が最終かつ決定版フルシチョフ党史となってしまったのである。

(5) 『ソ連共産党史(追補第三版)』—1969年—

1969年12月、『ソ連共産党史(追補第三版)』¹³⁷⁾——以下、『ブレジネフ版』ないし『六九年版』と略す——が出版された。執筆陣は、フルシチョフ期の『六二年版』と比べ、死亡にもとづくわずか一名の変更を除き、まったく同一の11名。分量は、『六二年版』刊行

ネルギー、革命的熱情はわれわれすべてを斗争へと鼓舞する。同志フルシチョフの特徴は、人民とわが党の力にたいする信頼、党路線を遂行する揺ぎない確信、共産主義の敵にたいする断固たる敵意、党とソビエト国家の内外政策実現における勇氣と決断である(長い拍手)。これらの資質は、同志フルシチョフを……忠実なるレーニン主義者とする……旺盛な活動、倦むことなく平和とすべての人民の自由を擁護し、……勤労者の提案にたいする思いやりある態度、庶民の声に注意ぶかく耳を傾ける能力のすばらしい模範。……人民と密接に結びつき、……オルガナイザーとしての大きな才能により、わが党と全ソビエト人民の愛と深い敬愛を克ちえた」。ХХІІ Съезд ..., I, стр. 340, 345, 351. もっとも、『六二年版』党史は、フルシチョフが第22回大会の席上「わたしに宛てて言われたことすべては、わがレーニン主義党の党中央委員会、同幹部会に宛てられるべき」との謙虚な発言をしたと紹介している。История КПСС (1962), стр. 729.

130) 新党史出版を告げるタス通信も、新党史が「スターリン個人崇拜の弊害を一層詳細に解明し」、「第22回党大会と新党綱領に特別の一章を与えた」と述べた。Правда. (10 ноября, 1962), стр. 2.

131) История КПСС (1962), стр. 444.

132) Там же. стр. 445.

133) Там же. стр. 486.

134) Там же, стр. 541.

135) Там же. стр. 540.

136) Там же. стр. 555.

137) История Коммунистической партии Советского Союза (издание третье, дополненное). (Москва: Политиздат, 1969). —以下 История КПСС (1969) と略す。

時から7年間の記録が追加されているにもかかわらず、『六二年版』と同じく19章構成で、逆に『五九年版』、『六二年版』と比べ、それぞれ7, 48 ページ少い736 ページとなっている。日本語がある¹³⁸⁾。

ブレジネフ政権成立から五年後の時点における出版である。むろん、フルシチョフを否定して成立した政権としてのブレジネフ & Co. が遅かれ早かれフルシチョフ党史を否定し自らの党史をもつだろことは、当然かつ予想されたことであった。とはいえ政権成立時から数えて五年目の1969年12月(また『第四版』刊行時として1971年末)の時点がことさら選ばれる必然性は見当らない。だが、ブレジネフ期に、フルシチョフ期の「非スターリン化」、「反党グループ」打倒、『新党綱領』発表に類する劇的な事件はなにも起らなかったのだから、党史の刊行ないし改変のための絶好の区切りはもともと欠如しているともいえるのである。しかも、ブレジネフ政権の基本方針がなによりもそのように極端な変革や断絶を嫌うことにある点にも注意しなければならない。ブレジネフ・コスイギン & Co. の最も得意とし好むコトの進め方は、〈なしくずしの路線変更〉であり〈静かなる価値転換〉である。つまり、勇猛果敢、饒舌なフルシチョフ政権がよらず鳴りもの入りで新方式導入をおこなったのと対照的に、ブレジネフ政権は、公式の無効宣言を伴わない黙殺による段階的空洞化、その傍らにおける明示のステートメントなしの代替物の「隠然たる」¹³⁹⁾準備・育成をなによりの身上とする。フルシチョフ期の遺産のなかで現在このような形で清算されつつあるものとして、「全人民国家」論、「米国に追いつき追いこせ」スローガン、『新共産党綱領』などがある。もっとも、臆病なブレジネフ政権に「チェコ軍事介入」を好例とする〈一刀両断的〉側面が存在することもたしかである。だが、それは、〈なしくずし漸進〉方式が(裏目にでるなどして)挫折、効を奏しない時に、喪われた時間とエネルギーを一挙にとり戻さんとして訴えられる例外的非常手段であり、むしろ平常の原則を補完する性質のものと考えられる¹⁴⁰⁾。しかし、ブレジネフ期の最初の党史たる本書が大した前触れやセンセーションを伴うことなしに出版されたといっても、予告らしきものすら皆無だったという訳ではない。些細なものとはいえ、つぎのような諸事実が注意深い者にはまえもって観察されたのである。

1. 第一の資料となるのは、政権交替の翌年1965年刊行された『ソビエト歴史百科辞典』第七巻所収の「ソ連邦共産党史」の項目である。そこでは「近年、党史の作成の仕事に、主観主義、主意主義、一面的評価という欠陥が生じていた」¹⁴¹⁾と記されたが、「主観主義、主意主義」がブレジネフ政権によるフルシチョフ統治方式批判の常套的レッテルであることからして、文中の非難がフルシチョフ党史に向けられていることは一目瞭然であ

138) 早川徹訳『ソヴェト連邦共産党史』(上・下)(東京:読売新聞社, 1971~2)。

139) たとえば、ブレジネフ政権下におけるスターリン主義復活の進め方にかんし、故 I. ドイツチャーは「決して公然とは (openly) スターリンないスターリニズムの擁護者とはならず」、「隠然たる (crypto) スターリニズム」を復活させている、と表現した。Isaac Deutscher, *Russia, China, and the West*. (London: Oxford University Press, 1970), p. 334.

140) かつて筆者は、ブレジネフ政権のチェコ介入を「臆病なる保守政権こそがその現状維持なる至上目的のためには時として勇猛果敢な非常手段に跳躍する逆説」と説明したことがある。木村汎「ソ連の対東欧政策」, 日本国際政治学会編『国際政治, 第44号(戦後東欧の政治と経済)』(東京:有斐閣, 1971), p. 2.

141) *Советская Историческая Энциклопедия*. Том. 7, стр. 718.

った。だが、『歴史百科』はこの一般的批判のみで、それ以上フルシチョフ期の二つの党史に言及することは避けたのである。余りにもブレジネフ的な〈黙殺による否定〉！ともかくこのような独特のテクニクで旧党史の否認作業を終えた『歴史百科』は、新党史の作成にかんしても、同様にきわめて原則的な立場の暗示に自らを止めたのだった。曰く、近年党史に生じた上記の欠陥を除去することを助けた「1964年10月、11月、65年3月の諸決定（＝すべてブレジネフ政権成立後の決定である—木村—）が、党史の一層の創造的研究の基礎である」¹⁴²⁾、と。

2. 第二は、ブレジネフ政権発足後再編成された党中央委煽動宣伝部の一人である科学教育部長 C. トラペズニコフの発言である。即ち、1965年10月8日付『プラウダ』掲載論文中で、最近社会科学の分野に「主観主義、主意主義的要素を証拠だてる深刻な欠陥や怠慢が現れている」と報告し¹⁴³⁾、さらに党史にかんじ次のように述べた。「ソ連共産党史の体系的コースを研究するかわりに、本質的にこの学問をもっぱら最近十年間の研究に帰してしまいういわゆる問題のあるコースを提案するくだらぬ歴史家たちがいた」¹⁴⁴⁾（傍点—木村）。ここで「最近十年間」がフルシチョフ期を指すこと改めて説明するまでもない。

3. 同様の趣旨は、1967年11月18日付『プラウダ』の論説「党史研究家の任務」にもみられた。即ち、同論説は、「党史がマルクス・レーニン主義教育の最重要源泉のひとつ」であるにもかかわらず、「その学問的研究水準がまだ不満足」であり¹⁴⁵⁾、とくに最近の歴史叙述の偏向ぶりを非難した。「歴史研究の著作のなかには、論議されつくした結論や情報が不足しており、時としては過去の事実や事件にある傾向性をもつ（тенденциозное）解釈をほどこしているものがある。」¹⁴⁶⁾（傍点—木村）

4. 最後にもっとも重要なものとして「スターリン復活」の動きがあるが、これについては別稿で論じたので、¹⁴⁷⁾ とくに戦史の分野における それについて一言するに止める。「スターリン」再評価の開始時点は、一般に1965年末ないし1966年初めともいえるが¹⁴⁸⁾、「軍人としてのスターリン」名誉回復作業は、早くも1965年4月頃からはじまった¹⁴⁹⁾。つまり、フルシチョフが秘密演説で「軍事戦略の天才」としてスターリンの偶像を破壊して¹⁵⁰⁾以来、ソビエト社会には軍事指導者としてスターリンがまったく無能力とのイメージが定着しようとしていたが、ブレジネフ政権下になってから、そのような批判が「行き過ぎ」で歴史を歪めるものであり、スターリンは対独緒戦の敗北を別にすれば全体としては秀れ

142) Там же.

143) “Марксизм-ленинизм—незыблемая основа развития общественных наук,” *Правда*. (8 октября 1965), стр. 4.

144) Там же.

145) “Долг историков партии,” *Правда*. (18 ноября 1967), стр. 11.

146) Там же.

147) 木村汎「矮小(?)政権の強硬路線」, 関西外交史研究会編『現代外交の理論と歴史』(京都: 有信堂, 1971), pp. 359-384.

148) Heer, *op. cit.*, p. 177.

149) ブレジネフ党第一書記(当時)は、1965年5月8日の第二次大戦 戦勝 20 周年記念集会でスターリンが「敵軍を撃退するためのすべての活動の指導にあたった」と称讃した。“Великая победа советского народа,” *Правда*. (9 мая 1965), стр. 2. ただし、このブレジネフ演説によるスターリン言及の意味の過大評価を戒める見解もある。Thomas B Larson, “What Happened to Stalin?” *Problems of Communism*. (vol. XVI, No. 2, Mar-Apr., 1967), p. 88.

150) “Secret Speech of Khrushchev...” pp. 42-56. とくに p. 52.

党史と政権

た軍人だという評価が、多くの将軍や戦史家によって相ついで指摘されはじめたのである¹⁵¹⁾。もちろん、そのようなスターリン擁護論が直ちにそのまま受け入れられたわけではない¹⁵²⁾。だが、フルシチョフ期の一方的行き過ぎを是正して「よりバランスのとれたスターリン像」¹⁵³⁾を確立しようとする動きが「歴史的客観性」追求の美名のもとに展開されてきたことは事実である。そして、このような軍人スターリンの再評価の気運がとうぜんフルシチョフ期に執筆された党史全体の再点検・書き換えを促す一つの重要な契機をなしたことは想像に難くないのである。

『第三版』党史の内容上の特色については、以下章を改めて論ずることとする。

II 比較的アプローチ

四つの党史の全面にわたる比較はとうてい不可能であるし、ごく概括的な比較はすでに I の歴史的概観のなかでも一部なされたと思うので、ここでは思いきって最重要ポイント二点のみを別扱し、やや詳細な検討を加えることにしたい。その二点とは、(1) スターリンの取扱い方如何？ とくに『六九年版』にブレジネフ政権の「スターリニズム」復活がどのていど表れているか？ (2) フルシチョフの取扱い方如何？ とくに『六九年版』にブレジネフ政権の「フルシチョフ路線」否定がどのていど表れているか？ である。既述のごとく、この二点を通じての真の狙いは、輪郭の定かでない現ブレジネフ政権の基本的姿勢と方向性の探求である。

(1) 「スターリン」問題

—スターリンにたいする態度は、しばしば根本的な政治的姿勢をしめす一種の尺度 (yardstick) となっている (W. レオンハルト)¹⁵⁴⁾—

A. バロメーターとしての「スターリン」

ソ連の将軍で戦史問題研究者でもある A. ボルチン少将は、ソビエトの「若い世代にとっては、スターリンがもはや激烈な論争の的でない」とはいえ、「歴史家にとっては、スターリン賛・否の評価が今後長年にわたって本格的な仕事になるだろう」と語ったといわれる¹⁵⁵⁾。この言を俟つまでもなく、「スターリン」評価の問題がここ当分ソ連の歴史家のみならず政治家をも悩ます最大の亡霊であり続けることは間違いない。ソ連において「ス

151) たとえば、E. Болтин, “Болнующие страницы летописи Великой Отечественной войны,” *Коммунист*. (№ 2, январь 1969), стр. 119-128; Г. К. Жуков, *Воспоминания и размышления*. (Москва; Издательство агентства печати *Новости*, 1969), стр. 232-239, 297. 清川・相場・大沢共訳『ジュエフ元帥回想録—革命・大戦・平和—』(東京: 朝日新聞社, 1970), pp. 173-177, 229.

152) 100 パーセントの信憑性をもたないとはいえ、このようなスターリン評価についてのソビエト歴史家たちによる論争の貴重な内幕を西側に伝えた貴重なドキュメントとして, “The Personal Cult,” *Survey*. (No. 63, April 1967), pp. 175-180 とくに pp. 175-180 参照。

153) *The New York Times*. (May 27, 1965); Heer, *op. cit.*, p. 177.

154) W. Leonhard, “Politics and Ideology in the post Khrushchev Era,” Alexander Dallin & Thomas B. Larson. (eds), *Soviet Politics since Khrushchev*. (Englewood Cliffs, N. J., : Prentice-Hall, Inc., 1968), p. 42; 加藤雅彦訳, 前掲 p. 397.

155) Werth, *op. cit.*, p. 190; 内山訳 p. 157.

スターリン、抜きに過去を語りえず、`スターリン、と対決することなしに現在何事もなしえない」といって過言でない。

スターリンは、レーニン死後30年にわたって争うべからざるワン・マン独裁者としてクレムリンに君臨、ソビエト社会の政・経・文・イデオロギーのすべての分野に測り知れないほど大きな刻印を捺した。ソビエト体制の形成、発展期におけるその役割と影響の大きさのゆえに、現在までソ連、東欧、その他の社会主義諸国において、本来あるべき社会主義とスターリニスト的適用の識別がきわめて困難となっている。たとえば、スターリンないしスターリニズムという言葉は、秘密警察や強制収容所のテロ、力づく上からの工業化や集団化、ワン・マン独裁、政治的反対者の抑圧と粛清、中央集権的計画経済などのイメージを連想させるが、果してこれらのうちどれが特殊スターリニスト的要因であり¹⁵⁶⁾、どれが本来あるいはレーニン主義的社会主義¹⁵⁷⁾に無縁、ないし異質の要因なのか？ 判別困難である。またかりに識別可能としても、スターリニスト的変^{ツリアント}形はあまりにも今日のソビエト体制の抜きさり難い一部分つまり体質と化しているの、それを除去すれば体制そのものが揺らぎ收拾つかぬ混乱、崩壊すらを導く危険が内包されている。(「《スターニスト》は、スターリン同様、共産主義という偉大な名称から不可分である」—フルシチョフ—)¹⁵⁸⁾。これこそ、まさに`スターリン、がソ連邦においてただの一度として完全には否定されたことがない所以である。即ち、`スターリン、のアンチ・テーゼとして登場し`スターリン、批判を表看板としたフルシチョフにしても、結局「スターリニズムの捕囚(prisoner)」¹⁵⁹⁾状態から脱けださえず、最絶頂期においてすら、中途半端で部分的「非スターリン化」しかおこないえず、また今日のブレジネフ政権が`スターリン、問題にいやが上にも慎重な態度をとっているのも、すべてこのためである。

ところが、まさにスターリンとソビエト体制とのかような密接不可分のからみ合いの故に、`スターリン、は、スターリン以後のすべてのソビエト政権、各国「社会主義」政権、世界共産主義運動にとって、避けえない一種の《踏絵》的存在ともなる。つまり、従来のソビエト体制からなんらかの変革を志す者(または志さない者)は、好むと好まないとにかかわらず、`スターリン、という壁に突きあたり、それにたいする態度表明なしにこの関門を擦り抜けえないから、`スターリン、をどう取扱うかによって、各政権の基本的姿勢を推測することが可能となる。たとえば、`スターリン、を貶価的に扱えば(例—第20回党大会後のフルシチョフ期)、その政権がスターリニスト的伝統から訣別、逆に`スターリン、を肯定的に取扱えば(例—1965年以後のブレジネフ期)、スターリニスト的遺産の温存のコミットメントを示す。だから、スターリン個人にたいする態度(例—遺体撤去あ

156) 周知のごとく、粛清などにかんし、故トリアッチが個人(=スターリン)と体制との結びつきを鋭く追求した(Palmiro Togliatti, "9 Domande sullo Stalinismo," The Russian Institute, *op. cit.*, pp. 120-121, 128.) のにたいし、ソビエト公式見解はこれをキッパリと否認した。"О преодолении культа личности ...," стр. 231~.

157) もちろん、この二つ即ち「本来の社会主義」と「レーニン版社会主義」は各々大いに異なる。木村汎「レーニン主義とロシア」、『世界思想』(京都:世界思想社, No. 7, 1971), p. 18.参照。

158) 傍点—木村。Правда. (19 января 1957), стр. 2.

159) Abram Brumberg, "The Fall of Khrushchev—Causes and Repercussion," Strong. (ed.), *op. cit.*, p. 14.

党史と政権

るいは胸像再設置)も、純然たる感情のレベルでなくきわめてホットな政治的決定をシンボライズした行為と解されるのである。

かくして、スターリンの亡霊は徒らにソ連社会に徘徊しているのではなく、各政権の政治的体質を予知する風針計として役立っているが、では既刊の四つの各時代の「党史」は、「スターリン」をどのように取扱い、それぞれの時代のどのような政治的姿勢を反映しているか？ この視点からとくに問題となる箇所を選んで、検討してみよう。

B. 一般的定型の抽出

1. 臨時政府にたいする態度

第一の例は、1917年3-4月に犯したスターリンの戦術的誤謬である。レーニンは1917年4月帰国するや、臨時政府を否認して「すべての権力をソビエトへ！」と叫んだが、このレーニンの方針を知るまでスターリンは、「臨時政府に圧力をかけ講和交渉を開始させる」¹⁶⁰⁾ことが適当と考える半メンシェヴィキ的誤りを犯した。この事件をどの程度まで明らかにするかは、1956年「非スターリン化」以来の最大の論争点であったが、四つの党史はそれをどのように取扱っているか？ 四つの版から該当箇所をとりだし対比すると、以下のごとくなる。(□は木村。以下同じ)

『スターリン小教程』	『フルンチェフ五九年版』	『フルンチェフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
流刑から帰ったばかりのスターリン、モロトフその他は、党の多数とともに、臨時政府不信任の政策を守り通し、祖国防衛主義に反対し、平和のための積極的斗争、帝国主義戦争反対を呼びかけた ¹⁶¹⁾ 。	スターリンは、臨時政府に圧力をかけて、講和交渉の即時開始を要求するという「まちがった」立場をとったが、まもなくこの立場をすててレーニンに同調した。	臨時政府に圧力をかけるという立場をとったのは、スターリンであった。彼は国家権力の新しい形態としてのソヴェトの意義と役割を理解していなかった。彼は、臨時政府に〈圧力〉をかけて、講和交渉の即時開始を要求するという政策を支持していた。この立場は、あたかもブルジョワ政府が人民に平和を与えうるかのような幻想を大衆に植え付けた。	臨時政府に「圧力」をかけて、講和交渉の即時開始を要求するという政策を支持したのはスターリンであった。
	スターリンはのちにこう述べている。「省略」 ¹⁶²⁾	スターリンはのちにこう述べている「省略」スターリンは、同様にメンシェヴィキとの統合という党の政策とレーニンの指示に矛盾する方策	スターリンはのちにこう述べている。「省略」 ¹⁶³⁾

160) И. Сталин, *Сочинения*. (Москва: Госполитиздат, 1951), Том 3, стр. 8. 邦訳『スターリン全集』(東京: 大月書店, 1952), 第三巻, p. 22. たとえば、西側の代表的教科書として、Leonard Schapiro. *The Communist Party of the Soviet Union*. (New York: Random House, 1959), p. 162 参照。

161) *Краткий курс*, стр. 176.

162) *История КПСС* (1959) стр. 210.

163) *История КПСС* (1969) стр. 192.

を唱導した。1917年4月中頃、スターリンは、自己の「まちがった」立場をすててレーニンの政綱に同調した¹⁶⁴⁾。

同一の歴史的事実をとり扱って、このように大きな差異が見いだされるのはまことに興味深いことといわねばならない。まず、『小教程』が完全なほおかむりをきめこんでスターリンは当初から臨時政府不信案政策をとったとしているのにたいし、残りの三つの版は、スターリンの臨時政府支持の事実を等しく承認する。だが、そこにみられる強弱ニュアンスの差は大きい。即ち、『フルシチョフ五九年版』は、スターリンが「まちがった (ошибочная) 立場」をとったというただの一言で簡単に済ます。『同六二年版』は、さらに□□で囲んだ部分をつけ足してスターリンの誤りの敷衍作業をおこなっている。『ブレジネフ六九年版』は、『フルシチョフ五九年版』にほぼ近いが、ただし「まちがった」という修飾語を省略している。

2. 『レーニン主義の基礎について』

つぎの例は、1924年4月刊行のスターリンの著作『レーニン主義の基礎について』である。この場合は、例1.と異なり、スターリンの「誤り」でなくむしろ「功績」に属する事柄であるが、四つの党史は、つぎのようにニュアンスの異なる記述をおこなっている。

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
<p>トロツキズムの思想的粉砕、レーニン主義の擁護において、1924年刊行された同志スターリンの理論的作品『レーニン主義の基礎について』は、重要な意義をもっていた。この小冊子はレーニン主義の優れた論述であり真面目な理論的基礎づけであった。それは当時全世界のポリシェヴィキをマルクス・レーニン理論の尖鋭な武器によって武装し、かつ現在も武装している。¹⁶⁵⁾</p>	<p>1924年に刊行されたスターリンの著書『レーニン主義の基礎について』も、このことをたすけた。この著書では、レーニン主義の基本的諸問題、プロレタリア革命の理論と戦術、プロレタリア独裁の理論と戦術が、圧縮されたかたちでの確に論述されており、レーニンがマルクス主義のなかにもちこんだ新しいものが解明されている¹⁶⁶⁾。</p>	<p>1924年に刊行されたスターリンの著書『レーニン主義の基礎について』も、トロツキズムの曝露をたすけた。この著書では、レーニン主義が圧縮されたかたちで論述されている¹⁶⁷⁾。</p>	<p>1924年に刊行されたスターリンの著書『レーニン主義の基礎について』も、トロツキズムの曝露をたすけた。この著書では、レーニン主義の基本的諸問題、プロレタリア革命とプロレタリア独裁の理論と戦術が論述され、レーニンがマルクス主義のなかにもちこんだ新しいものが解明されている¹⁶⁸⁾。</p>

すべて好意的な取扱いには違いないが、僅かとはいえ多少の差が生じている。つまり、『小教程』はもっとも長くもっとも好意的、『フルシチョフ五九年版』と『ブレジネフ六九年版』はかなり好意的、『フルシチョフ六二年版』はもっとも短く最小限度好意的な記述

164) *История КПСС* (1962) стр. 210.
 165) *Краткий курс*, стр. 255.
 166) *История КПСС* (1959), стр. 359.
 167) *История КПСС* (1962), стр. 379.
 168) *История КПСС* (1969), стр. 346.

といえる。

この二例によって、^{パータン}「スターリン」の処遇にかんし四つのソ党史間の一般的定型を類推すると、つぎのようなことになる。①『スターリン小教程』は、スターリンの業績を（質的量的に）最大限に礼讃する一方、彼の欠陥を（質的量的に）最小限に止めている。②これと対極をなすのは『フルシチョフ六二年版』で、スターリン称讃を（質的量的に）最小限に抑える一方、彼の批判を（質的量的に）最大限おこなう。③この両極の中間に位置するのが、『フルシチョフ五九年版』と『ブレジネフ六九年版』とである。換言すれば、『ブレジネフ六九年版』にみられる《スターリン復活》の程度は、フルシチョフ期『第一版』（1959年刊行）とほぼ同程度ということである。この一般的定型を念頭におきつつ、今少し具体例をみることにする。

C. ^{テクニツク}「省略」という政治技術

3. レーニン出廷問題

1917年7月蜂起鎮圧のあと、臨時政府がレーニンその他に裁判所出頭を命じたため、ボリシェヴィキ間に、レーニンが出頭して公開裁判による法廷闘争に訴えることの是非をめぐる、活発な討論が展開された。このとき、スターリンは、レーニンの身柄の安全保障という条件つきではあったが、レーニンが身を隠すよりも広範な大衆の面前で「ドイツのスパイ」の嫌疑をはらす案に与した。結局第6回党大会は、出頭すれば刑務所へ連行の途中で虐殺されるに違いないと判断し、出廷拒否を決定したが、ここにスターリンの一時的誤謬の問題が残ったのである。この歴史的事実を、四つの党史はそれぞれつぎのように述べている。

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
大会において、レーニンの裁判所出頭問題が審議された。	最初の議題のひとつとして代議員たちは、レーニンの裁判所出頭問題を審議した ¹⁶⁹⁾ 。	最初の議題のひとつとして代議員たちは、レーニンの裁判所出頭問題を審議した。	最初の議題のひとつとして代議員たちは、レーニンの裁判所出頭問題を審議した。
カ・メネフ、ルイコフ、トロツキーおよびその他は、大会開催前からレーニンが反革命主義者の裁判所に出頭する必要があると考えていた。 スターリンは、レーニンの裁判所出頭にたいしては、断固として反対した ¹⁶⁹⁾ 。		いく人かの代議員—スターリン、ヴォルダルスキー、マヌイルスキー—は、レーニンの身の安全が保証されることを条件に、レーニンが出頭してもいいと考えた。	いく人かの代議員は、レーニンの身の安全が保証され、裁判が民主的におこなわれることを条件に、レーニンが出頭してもいいと考えた。しかしこの審議の過程で、これらの代議員は、自案を撤回した ¹⁷¹⁾ 。
		スターリンは、当時のロシアの政治状況の評価を間違っ、七月事件後ブルジョワジーが統一権力を達成したにもかかわらず、あたかも誰の手に権力があるか定かでないかの如き発言をしていた。しかし、ブルジョワジーが	

169) 傍点—引用者。Краткий курс, стр. 190.

170) История КПСС (1959), стр. 220.

171) История КПСС (1969), стр. 209.

とくに統一権力を達成して以来、レーニンを処罰しないといういかなる保証もないことは明らかであった¹⁷²⁾。

つまり、『小教程』は、レーニン出廷を主張したのは、スターリンでなく「カーメネフ、ルイコフ、トロツキーら」であり、スターリンは「断固として反対した」（傍点—木村一部分参照）としている。フルシチョフ期『五九年版』は、あたかもかような論争が存在しなかったかのごとく言及を回避し、極力簡単な叙述ですましている。ところが、同『六二年版』は、スターリンがレーニン出廷を主張した「いく人かの代議員」の一人たることを明記し、かつ「当時のロシアの政治状況の評価を間違った」とスターリンを弾劾している（□部分参照）。ブレジネフ期『六九年版』は、「いく人かの代議員」がレーニン出廷を主張したとのみ記し、その筆頭がスターリンであるとの『六二年版』の記述を完全にカットしている。

このように、都合の悪い箇所、微妙なところは史実におかまもなく省略してしまうという技術は、どの版のソ党史においても頻繁に用いられる常套手段であるが、とくにスターリン批判の最もはげしい『六二年版』に明記されていたスターリンにかんする叙述が、『ブレジネフ六九年版』で削除されるというケースがもっとも多いといえる。

4. ワルシャワ進撃

たとえば、1920年夏に敢行されて見事に(?)挫折した赤軍のワルシャワ進軍は、以後「武力による革命の輸出」の失敗例とされているが、このさいのスターリンの責任にかんして、『フルシチョフ六二年版』と『ブレジネフ六九年版』とを比べてみると、前者における「イ・ヴェ・スターリン、ア・イ・エゴロフ（□の箇所）が、後者では（※印の箇所において）完全にカットされていることに気づくのである。

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
		ワルシャワ進撃のさいに禍根となったのは、司令部の行動が敏活でなかったことだった。南西戦線司令部（イ・ヴェ・スターリン、ア・イ・エゴロフ）がぐずぐずしていたこと、第一騎兵軍の西部戦線への転進が遅れたことは、そのひとつである ¹⁷³⁾ 。	ワルシャワ進撃のさいに禍根となったのは、司令部の行動が敏活でなかったことだった。南西戦線司令部（※）がぐずぐずしていたこと、第一騎兵軍の西部戦線への転進が遅れたことは、そのひとつである ¹⁷⁴⁾ 。

5. 外国貿易の独占

同様のスターリン名の操作は、1923年の外国貿易をめぐる論争の記述中にもみられる。四つの版から同一箇所を対比してみよう。

172) *История КПСС* (1962), стр. 230.

173) *История КПСС* (1962), стр. 326.

174) *История КПСС* (1962), стр. 295.

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
ブハーリンとソコーリニコフは、大会前から外国貿易独占を解消することを主張した。この提案もまたネップを自己の立場の資本主義への引渡しと解した結果だった。 ¹⁷⁵⁾	ソコーリニコフとブハーリンは、大会前から外国貿易独占を部分的に廃止することを主張したが、このことは実際には、この独占の廃止を導くことだった。 ¹⁷⁶⁾	ソコーリニコフとブハーリンは、外国貿易独占を部分的に廃止することを主張した。スターリン、ジノーヴィエフ、カーメネフを含む党中央委員会の大多数は、外国貿易の独占の緩和に傾いた。スターリンは、その《緩和が不可避となっている》と考えた。 ¹⁷⁷⁾	ソコーリニコフとブハーリンは、外国貿易独占を部分的に廃止することを主張した。党中央委員会の大多数は、これに傾いた。 ¹⁷⁸⁾

上記で明らかのように、レーニンに反対して外国貿易の独占緩和を提案した者として、『小教程』、『五九年版』、『六九年版』の三つは「ブハーリン、ソコーリニコフ」を挙げている。そして、フルシチョフ『六二年版』のみが、ジノーヴィエフ、カーメネフとともにスターリンに二度にわたって言及した（□□の箇所。傍点も木村。）が、ブレジネフ『六九年版』はそれを「党中央委員会の大多数」とのみ述べスターリンら具体的氏名を削除している。

以上二つの例（4. と 5.）は、『フルシチョフ六二年版』で明記されていたスターリンの名前が『ブレジネフ六九年版』で抹殺されたケースであったが、つぎの三例（6., 7., 8.）は、スターリン批判の文章全体が跡形もなく完全に消滅したケースである。

6. ジノーヴィエフ、カーメネフ擁護

1917年10月の武装蜂起を時機尚早として反対したジノーヴィエフとカーメネフの二人が後のちまで「革命のスト破り」として非難され続けたことは周知の事実であるが、当時その二人をかばったのは後にこの罪状のもとに彼らを粛清するスターリンその人だった。スターリンは、当時、彼ら二人の手になる蜂起反対の警告文を『新生活』誌に掲載の労をとり、このことがレーニンの激怒を招くやレーニン非難の論文を発表するとともに¹⁷⁹⁾、これらの効果を和らげる妥協的社説を掲げて両者の調停を試みた。この事件の解明は、同年はじめのスターリンの対臨時政府の「誤った」態度（例1.）と等しくスターリンをジノーヴィエフ、カーメネフと変りない半メンシェヴィキ立場におく結果を導くので、1956年来の「歴史論争」における最大の焦点をなしていたのだった¹⁸⁰⁾。しかし、1962年の『フルシチョフ第二版』は、この事件を思い切ってつぎのように国民の前に暴露するにいたった。

「スターリンは、中央委員会との同意なしに、そして編集局の他のメンバーの承諾をえ

175) *Краткий курс*, стр. 250-1.

176) *История КПСС* (1959), стр. 355.

177) 傍点—引用者。 *История КПСС* (1962), стр. 375-6.

178) *История КПСС* (1969), стр. 343.

179) Isaac Deutscher. *Stalin: A Political Biography*. (London: Oxford University Press, 1949), p. 104; 上原和夫訳『スターリン』（東京：みすず書房、1963）、(I) p. 138.

180) А. В. Снегов, “Несколько страниц из истории партии (март-начало апреля 1917 г.),” *Вопросы Истории КПСС*. (№ 2, 1963), стр. 15-30.

ずに、10月20日ジノーヴィエフの手紙を、「問題は解決したと考えうる」という彼の声明をつけて、新聞に掲載した。カーメネフとジノーヴィエフのスト破りを党から除名する件についてのレーニンの手紙は、10月20日の中央委員会の会議で討議された。スターリンは、ミリューチンとウリツキーの支持を受け、レーニンの要求に反対して妥協的立場をとった。彼は、カーメネフとジノーヴィエフのスト破りの党からの除名に反対するのみならず、彼らを中央委員会の構成から排除することにも反対し、この問題の検討を中央委員会総会まで延期することを提案した。¹⁸¹⁾

ところが、『ブレジネフ六九年版』は、この部分の記述の全面的削除をおこなったのである。

7. ブレスト＝リトフスク講和

結局は1918年3月3日締結されたブレスト＝リトフスク講和条約をめぐる、ポリシェヴィキが①即時講和派（レーニン）、②「革命戦争」継続派（ブハーリンら「左翼共産主義者」）、③「戦争も講和もしない」派（トロツキー）の三つに分裂して大論争を展開したことも、よく知られているが、この時のスターリンの態度が問題である。レーニン以上にヨーロッパ革命の幻想に憑りつかれることが少く「ロシア」革命の擁護が最大の関心事だったスターリンは、最初からレーニンに与みする講和派だったと考えるのが常識的妥当な見解というものだろう。名高い反スターリンのトロツキストの権化 I. ドイツチャーですら、この見解を採る¹⁸²⁾。だが、他方、スターリンが講和派にまわったのは「後になって (later)」¹⁸³⁾からだと言く見解もある。生憎本稿の筆者にその真偽を即答する能力は欠如しているが、ここでより重要なことは、四つの党史中『フルシチョフ六二年版』のみがつぎに引用するようにこの後者の見解をとり、『ブレジネフ六九年版』が直ちにその部分を削除した事実である。

「スターリンは動揺し、講和交渉に賛成しはしたが、新しい条件下で講和条約を締結することに反対であった。レーニンに批判された後、スターリンは、この条件で講和条約を締結することが必要であると述べた。」¹⁸⁴⁾

8 レーニンの遺言

「レーニンの遺言」の補遺として最も有名な部分、即ち「スターリンは粗暴すぎる。この欠陥は、われわれ共産主義者のあいだのつきあいでは十分許されるけれども、書記長の職務にあるものとしては許し難い」¹⁸⁵⁾と述べた部分は、どの党史にも直接には引用されていない。だが、そこでレーニンがスターリンの「若干の否定的な個人的資質」を指摘し、スターリン自身の反省と矯正の必要を促がし、代りの書記長選出を提案したことは、『小教程』

181) *История КПСС* (1962), стр. 244.

182) Deutscher, *Stalin*, p. 188; 邦訳 p. 155. 西側の権威 Leonard Schapiro も同見解のようである。Schapiro. *The Communist Party of the Soviet Union*, p. 184.

183) たとえば, George von Rauch, *A History of Soviet Russia*. (New York: Frederick A. Praeger, Inc., 1957), p. 74; 丸山修吉訳『ソヴェト・ロシア史』(東京:法政大学出版局, 1971), p. 70.

184) *История КПСС* (1962), стр. 271.

185) “Неопубликованные документы В.И. Ленина,” стр. 18.

党史と政権

を除くすべての版に記されている。ところが、『フルシチョフ六二年版』のみは、この記述だけではなお不十分であるとして、スターリンがその後レーニンに指示された責務を「実行せず」、「その結果党が蒙った困難」にかんし、つぎの一節を付加していた。

「しかし、その後の生涯が示したごとく、スターリンは、レーニンの批判的評言からの必然的な結論を実行しなかった。彼は大会に従わず、自己の約束と保障を実行しなかった。その結果、党と国家は、その後スターリンの個人崇拜によって惹きおこされたあらゆる困難に耐えなければならなかったのである。」¹⁸⁶⁾

『ブレジネフ六九年版』は、その前後は一字一句違わぬ文章を保持しつつ而もこの一節のみは削ったのである。

D. 三大キー・イシュー

以上、四つの党史間の差異をきわだたせようとして「スターリン」にかんする問題をアット・ランダムにとりあげてきたが、この目的は一応達成されたことと思う。つぎはいよいよ、ふつう「スターリン」色を測定するさいの決め手 (key issues) とみなされている項目に正面からの重点的アプローチを試みることにしよう。そして、そのような「スターリン」問題のやまないしかんどころとして、「粛清」(9.)、「農業集団化」(10.)、「大祖国戦争」(11.)の三つを選ぶことは、まず異論ないところと思われる。

9. 粛清—キーロフ暗殺を中心として—

「スターリン」問題を論ずるさいの最大ポイントとなるのは、「スターリニズム暗黒面」の同義語ともいふべき「粛清」とくに30年後半の「大粛清」である。スターリニズムのこの局面のためにロシア国民と社会が支払った犠牲¹⁸⁷⁾の十全な解明なしに「スターリニズム」¹⁸⁸⁾ひいてはソ連型「近代化」の真の評価¹⁸⁹⁾が不可能なこと改めて説くまでもない。そして、自らの歴史の恥部にどの位勇敢にメスを入れうるかは、歴史書を真に客観的なものたらしめる試金石といえる。しかし、これは所詮ソ党史にたいするものねだりではあった。なぜなら、『スターリン小教程』がスターリンによる粛清についてただの一行も記していないのは当然としても、「スターリン以後の三つの党史も、「社会主義法秩序の侵害と大量弾圧」としての粛清に二ページばかり紙数を割きはしているものの、それはつぎのように

186) *История КПСС* (1962), стр. 383.

187) 英国の詩人、且つ現代世界有数のクレムリノロジスト R. コンクェストは、1936-38年に約100万人が実際に粛清、少くとも200万人以上が強制収容所で死亡、集団化の過程に少くとも350万、総計1930-40年に650万人の生命がスターリンのテロリズムによって喪われた、と推定する。Robert Conquest. *The Great Terror: Stalin's Purge of the Thirties*. (London: Macmillan, 1968), pp. 529-533; Z, ブジェジンスキーは、1937-38年中に黨員だけでも85万人が粛清されたと見積っている。Zbigniew Brzezinski, *The Permanent Purge*. (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1956), pp. 98-99; 原子林二郎訳『全体主義と粛清』(東京:時事通信社, 1957), p. 140.

188) ブジェジンスキーは、ソビエト社会のスターリニズム的変形を「浪費」、「残酷」、「不成功」、「不必要」と評価する。Zbigniew Brzezinski "The Soviet: Past and Future," *Encounter*. (Mar. 1970), p. 4.

189) ロシア革命五十年の損益表にかんしては、さしあたって、*Survey*. (No. 64, July 1967) の特集 "The Soviet Russian Revolution 1917-1917: A Balance Sheet" 参照。

限定された性格のものだからである。第一に、故トリアッチによって鋭く追求された粛清と体制との関連¹⁹⁰⁾が余りにも軽くいなされている。つまり、粛清はあくまで社会主義体制の本質には無縁な、勝利におごった一個人の例外的逸脱行為として処理されている。たとえば、『六九年版』は、つぎのように断言する。「社会主義的法秩序の破壊と大量弾圧は、共産党、社会主義建設に深刻な損失をあたえた。しかし、これらの不正常（ненормальные）現象も、社会主義的社会体制の性格と性質、社会主義国家の性質と本質を変えることはできなかったし、亦変えはしなかった。」¹⁹¹⁾（傍点一木村）。第二は、粛清がきわめて抽象的な形で語られるのみで、その経過、犠牲者の名称や数等の具体的事実には一さい口をつぐんで明らかにしない方針が貫かれている。つまり第20回党大会（1956年）でのフルシチョフ秘密演説は粛清の具体的様相をかなり大胆に暴露したが、その後のいずれの公開党史もその方針を敷衍、継承することを強く拒否する姿勢を依然としてとり続けているのである。

したがって、ここでもきわめて不本意ながら30年代後半の大粛清の発端となったキーロフ暗殺事件を検討、比較するに止めざるをえない。1934年12月1日、スターリンの一番弟子でジノーヴィエフ派の拠点レニングラード乗っ取りのため派遣されていた C. M. キーロフが、ニコラーエフによって狙撃され謎の死をとげた。当時の公式発表は、ジノーヴィエフ、カーメネフら「レニングラード派」をニコラーエフの背後の使喚者であるとみなし、事件を彼らにたいする弾圧・粛清開始の口実とした。だが、事件から22年後の1956年フルシチョフは、その秘密演説中において、キーロフ暗殺が反対派抑圧の口実をつくるためスターリン自身によって仕組まれたものである旨示唆した¹⁹²⁾。また、元メンシュヴィキの経歴をもつ西側きってのクレムリノロジスト B. ニコラーエフスキーは、事件を政策、声望、権力をめぐるスターリン vs. キーロフの闘いという角度から説明しようとした¹⁹³⁾。このような背景や予備知識を念頭において、四つの党史の記述を比較してみるとどうか？

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
犯罪の現場で取押えられた殺人者は、レニングラードで「ジノーヴィエフ」の反ソ団体の加盟者により組織された反革命的秘密グループのメンバーであることが判明した。……審理と裁判の結果ジノーヴィエフ、カメネフ、エフドキーモフ、その他前記団体の指導者たちが……醜悪な役割を演じたことが明	犯罪の現場で取押えられた殺人者は、……党の指導的活動家たちにたいする敵意と憎悪の感情にみちていた脱落者であって、「ジノーヴィエフ反党グループの以前の加担者の一部と交際していた。」かれは、……党員証にかくれて凶悪な犯罪を犯したのである。	犯罪の現場で取押えられた殺人者は、……党の指導的活動家たちにたいする敵意と憎悪の感情にみちていた。 （かれは）……党員証にかくれて凶悪な犯罪を犯したのである。	犯罪の現場で取押えられた殺人者は、……党の指導的活動家たちにたいする敵意と憎悪の感情にみちていた。 （かれは）……党員証にかくれて凶悪な犯罪を犯したのである。

190) Palmiro Togliatti, *op. cit.*, pp. 120-121, 128.

191) *История КПСС.* (1969), стр. 452.

192) "Secret Speech of Khrushchev ..., " pp. 125-26.

193) Boris I. Nicolaevsky. *Power and the Soviet Elite.* edited by Janet D. Zagoria. (New York: Frederick A. Praeger, 1965), p. 69-102, とくに p. 102; 中村平八・南塚信吾訳『ソヴェト・エリート』(東京:みすず書房, 1970), pp. 80-108 とくに p. 108.

らかになった。

彼らは「トロツキー」との関係を隠蔽した。……キーロフの暗殺は、……この合同トロツキスト＝「ブハーリン」徒党によって行なわれたのである。……すべてこの暗殺者とスパイ団の主な使喚者と組織者は、ユダ・トロツキーであった。トロツキーの……指示の遂行者はジノーヴィエフ、カーメネフ、その他トロツキスト的追随者だった。彼らは「帝国主義者」のソ連邦攻撃のばあいにおける……「日独ファシスト」の卑しむべき下僕となり手先となった¹⁹⁴⁾。

エス・エム・キーロフの暗殺は、黨員証がけがらわしい反ソヴェト活動を隠蔽するために利用されるばあいがあることをあきらかにした。それがどんな仮面によって隠蔽されていようと、社会主義とソビエト国家の利益とに敵対する行為を不可能にするために、党を異分子から守ることが必要であった¹⁹⁵⁾。

これは、共産党第20回党大会の席上で、エス・エス・フルシチョフが報告したごとく、その状況がいまだに調査されつつある故意犯である。エス・エム・キーロフの暗殺は、党と国家の生活に大きな影響を与えた。これは完全に個人崇拜の状況下のことであった。「スターリン」は、彼の気にいらぬ全ての人々を処罰するキッカケとしてこの暗殺事件を利用した。多くの逮捕が続いた。大量抑圧と社会主義的法秩序の重大な違反の端緒となったのだ¹⁹⁶⁾。

エス・エム・キーロフの暗殺は、党とソビエト国民の警戒心を強めさせた。事件は革命的警戒心をたかめることの必要性をあらためて思いおこさせた。それがどんな仮面によって隠蔽されていようと、社会主義とソビエト国家の利益とに敵対する行為を不可能にするために、党を異分子から守ることが必要であった¹⁹⁷⁾。

『小教程』がおこなっている殺人の教唆者の範囲をしだいに拡大してゆく過程には驚くべきものがある。即ち、ニコラーエフ→ジノーヴィエフ→「レニングラード派」→ジノーヴィエフ＝トロツキー連合→日独ファシスト帝国主義者。『五九年版』では、まだ殺人者が過去にジノーヴィエフ一派と連繋があるとしていたが、『六二年版』にいたって一転し『小教程』以来の背後関係を絶ち切る一方むしろスターリンのかくれた動機を示唆し、新しい方向を拓くかに見えた。だが、ブレジネフ期『六九年版』は、責任追求を断念し抽象的な表現と無人称の蔭に問題を回避する方針をとった。

10. 農業集団化のゆきすぎ

今日、高度先進国と目される諸国中でソ連邦のみが農業不振に悩んでいる原因として、「非体制的理由」(天候不順、投資不足、等)のほか、「体制的理由」(集団化の結果としての巨大病^{ジャイガンタイズム}やインセンティブの欠如、等)が指摘されている。しかし、ソビエト公式見解は、あくまで集団化が「客観的に必要不可欠」、「党による合理的な選択の結果」、「レーニン^{レニ}の協同化プランの実現」である¹⁹⁸⁾。ただ、集団化の具体的な執行の方法やスピードにかん

194) *Краткий курс*, стр. 310-312.

195) *История КПСС* (1959), стр. 463.

196) *История КПСС* (1962), стр. 486.

197) *История КПСС* (1969), стр. 437-8.

198) В. П. Данилов, “Материально-техническая база сельского хозяйства СССР накануне сплошной коллективизации,” *Вопросы Истории*. (№ 7, 1956), стр. 3, 17; Б. И. Погудин, “Некоторые вопросы историографии коллективизации в СССР,” *Вопросы Истории*. (№ 9, 1958), стр. 119, 121, 123; Б. П. Данилов, “К итогам изучения истории советского крестьянства и колхозного строительства в СССР,” *Вопросы Истории*. (№ 8, 1960), стр. 34-64.

し誤りやゆきすぎが犯されたにすぎない。しかも、集団化にあたってのレーニンの自発性の原則が侵犯されたのは、主としてクラークその他の敵の陰謀、現実状況との接触を喪って勝利を焦った地方の現場指導、党内の左翼的偏向に基く、との立場をとっている¹⁹⁹⁾。

さて、それらの誤りやゆきすぎにおけるスターリンの役割であるが、四つの党史において次のようになっている。『小教程』と『五九年版』は、コルホーズ化において「欠陥(недочеты)」、「強制(принуждение)」、「ゆきすぎ(перегибы)」、「誤り(ошибки)」がおこなわれた事実を卒直に承認するが²⁰⁰⁾、スターリン個人にたいする責任追求をまったく行わず、それを「党員労働者」、「地方組織」²⁰¹⁾、「党組織」²⁰²⁾の責任に転嫁する。ところが、『フルシチョフ六二年版』は、スターリンを名指しで(六回)「コルホーズ建設における深刻な誤謬」の責任者としたのである。同党史によると、スターリンは、① 1929年12月末、マルクス主義農業専門家会議で、農業生産の協同化遂行にかんし「過度に急ぐ」ことを戒しめたレーニンの指示やエンゲルスの教えを無視して、集団化テンポを速めるよう呼びかけた²⁰³⁾。② 1930年2月3日付『プラウダ』社説中に「最近の集団化の予定(=1930-31年中に貧-中農経営の75%)は、マキシマムでない」と書くよう指示した²⁰⁴⁾。③ 起りうるゆきすぎをまえもって予想するために社会化の意義を早急に明らかにするようとの地方党委員会による執拗な請願に必要な説明を与えなかった²⁰⁵⁾。④ 農民の小規模経営にたいする愛着を過少評価するという「最大の誤算で多くの誤りの原因(самый крупный просчет и источник многих ошибок)」をつくった²⁰⁶⁾。『ブレジネフ六九年版』は、集団化のゆきすぎ一般はこれを厳しく批判するが、その責任の所在を「党カードル」²⁰⁷⁾に帰してスターリン個人には言及しないという立場に後退(?)した²⁰⁸⁾。最後に、四つの版におけるこの問題の取扱いの差異がもっともよく現れているのは、スターリン論文「成功による眩惑」(1930年3月14日)にかんする次の記述中においてである。

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
同志スターリンの論文は、もっとも大きな政治的意義をもっていた。この論文は党組織がその誤	この論文は、コルホーズ建設における党の政策を説明したものであり、党の基幹活動家に、コル	党中央委政治局はスターリンに意見を述べるよう頼んだ。しかし、スターリンはこの論文を政治	この論文は大きな積極的役割をはたした……。論文は党幹部が、コルホーズ建設でおかした誤ち

199) このソビエト公式見解にたいし、わが国の溪内謙氏は、きわめて実証的な研究によって集団化が「党の特定の指導者の頭脳によって自覚的に先取されたものでなく」穀物危機という現実状況にたいする「追従と適応との便宜主義のなかから自然発生的に形成されてきた帰結」である、とのユニークな説を提唱された。溪内謙『スターリン政治体制の成立(第I部)―農村における危機―』(東京:岩波書店, 1970), p. 490, p. 384以下。なお筆者による同書評、『朝日ジャーナル』(東京:朝日新聞社, 1971年3月5日号), pp. 63-64; 『社会思想研究』(東京:社会思想研究会, 1971年8月号), p. 43-47も参照。

200) *Краткий курс*, стр. 293-295; *История КПСС*. (1959), стр. 422-424.

201) *Краткий курс*, стр. 293, 294.

202) *История КПСС* (1959), стр. 422.

203) *История КПСС* (1962), стр. 442.

204) *Там же*. стр. 443.

205) *Там же*.

206) *Там же*. стр. 444.

207) *История КПСС* (1969), стр. 403.

208) *Там же*. 402-405.

党史と政権

<p>りを是正するのを助け、ソビエト権力の敵にもっとも強い打撃をあたえた。……</p>	<p>ホーズ連動でおかした誤りを是正し、集団化の成果を固めさせるために書かれた。……</p>	<p>局員と調和させなかった。論文は二重の意味をもった。……</p>	<p>やゆきすぎを是正する途に向かわせた。しかしこの論文にはまえに述べたこれら誤ちの原因が十分には解明されていなかった。……</p>
<p>この論文は農民大衆を安心させた²⁰⁹⁾。</p>	<p>コルホーズ建設でおかした誤りの是正にかんする「党」のエネルギーな措置は、農民大衆を安心させた²¹⁰⁾。</p>	<p>コルホーズ建設でおかされた誤りのエネルギーな是正は農民大衆を安心させた²¹¹⁾。</p>	<p>誤りのエネルギーな是正は農民大衆を安心させた²¹²⁾。</p>

11. 大祖国戦の指導

大祖国戦、すなわち独ソ戦開戦後の第二次世界大戦（1941-45）中におけるスターリンの功罪評価は、「スターリン」問題のやまばの一つである。この期間、党書記長、人民委員会議々長（首相）、国防人民委員のほか、大元帥、ソ連邦軍最高司令官、国家防衛委員会議長の重要ポストを兼務したスターリンは、ソ連邦の国防ならびに戦争遂行上の出来不出来の最終責任者だった。まず、存命中ならびに死後1956年まで「軍事戦略の大天才」という一律的評価が支配した。だがフルシチョフは、56年秘密演説中で、この軍事英雄スターリンが大戦中「どの前線または解放都市をも訪問せず」、「地球儀で作戦計画をたて」、「数十万の兵士を犠牲にした」と非難²¹³⁾、栄光の座からひきずりおろした。しかし再びブレジネフ政権下の1965年以後、フルシチョフ個人の政治的動機によって不当に歪められた「軍人スターリン」評価の振子を再度逆方向に動かしよりバランスのとれた「客観的なスターリン」²¹⁴⁾の歴史像再建の機運がもりあがり²¹⁵⁾、「スターリン復活」²¹⁶⁾の兆候として騒がれた。以上簡単に要約した「軍人スターリン」評価の変遷が、党史（一とうぜん祖国戦前刊行の『小教程』をのぞく一）において、いかに取扱われているか？ 概していえば、三つの党史ともデリケートで最終評価の出ていないこの問題を不問にふしている感が強いが（一例をあげれば、大祖国戦に当てられた50～60ページにおよぶ膨大な章において、上述のごとき最高責任者たるスターリンの名前はわずか6～7回しか言及されていない！）²¹⁷⁾、

209) *Краткий курс*, стр. 295.

210) *История КПСС* (1959), стр. 423-424.

211) *История КПСС* (1962), стр. 445.

212) *История КПСС* (1969), стр. 405-6.

213) “Secret Speech of Khrushchev...,” pp. 50-52.

214) 1967年1月4日付『ブラウダ』掲載のB.モロゾフ論文は、スターリン評価が、結局は自己弁明のためにスターリンを利用しようとする軍事回想録の続出によって攪乱されている実状にたいし、ソビエト回想録による過去の事件の「厳しい客観的 (строго объективное)」な解明を要請した。
“О Военных мемуарах,” *Правда* (4 января 1967), стр. 3.

215) 木村汎前掲「矮小」政権の強硬路線」pp. 370-372参照。

216) 俗にブレジネフ政権下でネオ・スターリニズムと呼ばれる現象を「反スターリン・キャンペーンの停止」と「スターリン復権の新キャンペーン」の二つに峻別するならば、S.ピアラーは“軍人スターリン”をめぐる動きを前者の性格の域にとどまるものと捉える。Seweryn Bialer, (ed.), *Stalin and his Generals: Soviet Military Memoirs of World War II*. (New York: Pegasus, 1969), p. 31.

217) *История КПСС* (1959), стр. 516-578; *История КПСС* (1962), стр. 537-596; *История КПСС* (1969), стр. 476-527.

この逃げをうった大同小異の中にもやはり若干のニュアンスの差は発見される。問題を、N. ヘヤーにしたがい²¹⁸⁾、スターリンの ① 緒戦の敗北にたいする責任、② 部下たる軍事指導者たちの取扱い、③ 大戦全体の指導、の三点に分けて検討してみよう。

① 独ソ戦開始直前の時期にスターリンがおかした予見の甘さ、その結果としての戦争準備不足については、どの版の党史も卒直に承認、記述している²¹⁹⁾。たとえば「戦争前夜の軍事戦略状態の評価におけるスターリンの許されざる誤算」、「スターリンの戦争の脅威の過少評価」、「ファシズムにたいするスターリンの警戒心欠如」、等々。だが、『六二年版』および『六九年版』は、「著るしい部分の責任」が、「赤軍に戦闘準備態勢をとらせる緊急措置をとらなかった」C. K. ティモシエンコ、Г. К. ジューコフら国防人民委員部や参謀本部首脳にもあるとし²²⁰⁾、さらに『六二年版』のみは、1941年4月フルシチョフがスターリン宛て送った「信号、懇願、警告」が後者によって無視された挿話をことさら付加している²²¹⁾。

② スターリンが、果してヒトラーの攻撃時期につき正確な情報を入手していたか否か²²²⁾、また入手した情報を正しく評価したか否か²²³⁾、にかんしては議論が分れるが、西側では、仮にスターリンが当時ナチの攻撃を予知しえたにせよ、彼にはそれに対処しえない内政的事由のためどうすることもできなかったと説かれている²²⁴⁾。そしてその「お家の事情」とは、なによりもまずスターリン自らが30年代の粛清により優秀な軍事指導者を大量に(75パーセント)喪っていた事実である²²⁵⁾。この事情を、『六二年版』および『六九年版』はつぎのように記す。「1939年から1941年6月までの期間、軍事力はほとんど3倍に増加された。……しかし、赤軍の建てなおしと技術的再軍備は完成されなかった。……赤軍は、経験をつんだ幹部要員を欠如していた。多くの重要な司令官——В. К. Бリュ

218) Heer, *op. cit.*, p. 246.

219) *История КПСС* (1959), стр. 519; *История КПСС* (1962), стр. 540; *История КПСС* (1969), стр. 478.

220) *История КПСС* (1962), стр. 541; *История КПСС* (1969), стр. 479.

221) *История КПСС* (1962), стр. 540-541.

222) たとえば、ジューコフは、当時スターリンが得ていた情報や資料がきわめて不完全なものであって、攻撃時期を見抜くことは「当時の条件のもとでは極めて困難」で、たとえスターリン以外の誰であっても、誤算を犯しただろう、と述べる。Жуков, *op. cit.*, стр. 239; 邦訳 p. 177. これにたいして、当時の軍事情報担当者は、猛然と反論し、“Читатели обсуждают книгу,” *Вопросы Истории КПСС*, (№ 2, февраль 1966), стр. 154-156; 『六九年版』も「信ずるに足る (достоверные) 資料」があったという。*История КПСС* (1969) стр. 478.

223) И. П. Прусановは、スターリンが自己の軍事情報顧問たちを過少評価していたと述べるが И. П. Прусанов, “Повышение организующего и направляющего влияния партии в вооруженных силах (1956-1964 гг.),” *Вопросы Истории КПСС*. (№ 2, февраль 1965), стр. 4-6; コーネフ元帥はスターリンが彼らを重用したと述べる。И. Конев, “Сорок пятый год страницы воспоминаний,” *Новый Мир*. (№ 5, май 1965), стр. 38.

224) Maury Lisann, “Stalin the appeaser”, *Survey*. (No. 76, Summer 1970) pp. 53-63. もっとも、『六九年版』は、スターリンが防衛準備態勢をとることによって「攻撃のためのなんらかの口実をドイツ・ファシストたちにあたえることを惧れていたため」と一応説明する。*История КПСС* (1969), стр. 478.

225) Lisann, p. 61. Прусановもこれを裏づけ「消耗戦の前夜に多くの才能ある軍事指導者、司令官、政治部員を根絶したことが個人崇拜のもっとも深刻な結果だった」と断言する。Прусанов, *op. cit.*, стр. 6.

党史と政権

ヘル、A. H. エゴロフ、M. H. トゥハチェフスキー、И. П. ウボレヴィチ、И. Э. ヤキール、その他——が、戦前に謂われなく抑圧されてしまっていた。」²²⁶⁾

③ 大祖国戦開始後ならびに期間中の軍事指導者としてのスターリンの評価にかんし、三つの党史はニュアンスを変える、四つ例をあげる。一は、独ソ開戦後10日を経ない6月30日結成の国家防衛委員会の記述である。創設とともに議長に就任したのはスターリンその人であるが、これを明記したのは、『五九年版』のみで、『六二年版』および『六九年版』はスターリン名を次のように省いた。

『スターリン小教程』	『フルンチョフ五九年版』	『フルンチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
	イ・ヴェ・スターリンを先頭とする国家防衛委員会がつくられた ²²⁷⁾ 。	国家防衛委員会がつくられた ²²⁸⁾ 。	国家防衛委員会がつくられた ²²⁹⁾ 。

二は、1941年11月6日にスターリンがモスクワ勤労者代議員ソビエト宛ておこなった演説である。三つの党史の叙述は以下のように異なっている。

『スターリン小教程』	『フルンチョフ五九年版』	『フルンチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
	前線が近いにもかかわらず、1941年11月6日モスクワで、首都の党組織と社会団体との共同主催で、モスクワ勤労者代議員ソビエトの伝統的な会議がひらかれた。イ・ヴェ・スターリンが10月社会主義大革命24周年記念の報告をおこなった。彼は、国に襲いかかっている危機がよまってきたことを指摘し、前線をたすけるために献身的に労働するよう党政府を代表してソビエト国民に呼びかけ、ドイツ・ファシスト軍の軍事力を壊滅させるという任務、ソビエト人民を奴隷化するためにソビエト領土に侵入してきたファシスト侵略軍全部をひとりのこらず殲滅するとい	1941年11月6日、前線が近いにもかかわらず、例年のとおり、10月社会主義大革命24周年のための、党組織と社会団体との共同主催で、モスクワ勤労代議員ソビエトの勝利の会議がひらかれた ²³⁰⁾ 。	1941年11月6日、例年のとおり前線が近いにもかかわらず、10月社会主義大革命24周年のための、モスクワ・ソビエト、党組織と社会団体との共同主催でモスクワ・ソビエトの勝利の会議がひらかれ、イ・ヴェ・スターリンが報告演説をおこなった。 ²³¹⁾

226) *История КПСС* (1962), стр. 539; *История КПСС* (1969), стр. 478.

227) *История КПСС* (1959), стр. 520.

228) *История КПСС* (1962), стр. 542.

229) *История КПСС* (1969), стр. 480.

230) *История КПСС* (1959), стр. 551.

231) *История КПСС* (1962), стр. 487.

『う任務を提起した²³²⁾。』

解説を加えるまでもなく、同一のスターリン演説を、『五九年版』はじつに詳細・丁寧に紹介、『六二年版』は抹殺、『六九年版』はわずか一行に要約している。

三の翌日スターリンが赤い広場の赤軍閲兵式でおこなった演説にも、まったく同様の差異がみられる。

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
	<p>11月7日、モスクワの赤の広場で赤軍の伝統的な閲兵式がおこなわれた。イ・ヴェ・スターリンは、赤軍の戦士、男女パルチザン、全ソビエト国民に呼びかけてつぎのように述べた。</p> <p>「全世界は、諸君たちをドイツ侵略軍という強盗的大軍勢を絶滅しうる力と看なしている。ドイツ侵略軍の軛につながれたヨーロッパの奴隷化された諸国民は、諸君を自分たちの解放者と看なしている。偉大な解放の使命が諸君の役目となった。この使命にふさわしくあれ！ レーリンの旗のもとに一勝利にむかって前進せよ！」</p> <p>戦闘装備をしたソビエト軍は、閲兵式からまっすぐ前線におもむいた²³³⁾。</p>	<p>1941年11月7日、赤の広場レーニン廟の前でソビエト軍の伝統的な閲兵式がおこなわれた。</p> <p>部隊は、閲兵式からまっすぐ前線におもむいた²³⁴⁾。</p>	<p>1941年11月7日、赤の広場のレーニン廟の前でソビエト軍の伝統的な閲兵式がおこなわれた。</p> <p>部隊は、閲兵式からまっすぐ前線におもむいた²³⁵⁾。</p>

四は、大祖国戦争の最終的勝利の功績者は果して誰か？ 換言すればわがスターリンがどの程度その名誉に与りうるかの点である。三つの党史は、きわめて個性的な対照をしめす。『フルシチョフ五九年版』は、スターリンの功労を真正面から賞讃する。「大祖国戦争におけるソ連邦の勝利は、И. В. Сталинを先頭とする共産党および党中央委員会の指導のもとに克ちとられた」²³⁶⁾(傍点一引用者)。『同六二年版』は、これと正反対である。すなわち、まず、「大祖国戦争におけるソ連邦の勝利は、党中央委員会を先頭とする共産

232) Там же.

233) История КПСС (1959), стр. 535.

234) История КПСС (1962), стр. 551.

235) История КПСС (1969), стр. 478.

236) История КПСС (1959), стр. 576.

党の指導のもとにソビエト人民によって克ちとられた」²³⁷⁾と、勝利の功績をフルシチョフ支配の党中央委と人民に与え、さらにスターリンにかんし意味を明確にして、次のように述べた。「ソビエト人民による自由と独立を求める英雄的な戦いの試みは、個人崇拜期につくられたあたかも И. В. スターリンが戦線と銃後におけるすべての最も重要な勝利の唯一の創造者であったかのごとき伝説を、完全に論駁する」²³⁸⁾『ブレジネフ六九年版』は、この二つの真向から対立する見解のどちらに与みしたか？ 答は、あまりにも「ブレジネフ的、(!?)」であった。すなわち、態度決定を迫るすべての煩わしい問題にたいする例の《ノー・コメント》という逃げの一手である。すなわち、この部分は、『ブレジネフ版』において全面削除されている²³⁹⁾。

12. 個人崇拜批判

最後の例として、スターリン批判を直接的な形でおこなっている箇所を比較しよう。ここでも『スターリン小教程』が除外されるのは言うまでもないとして、のこりの三つの党史で正面切った「スターリン個人崇拜批判」に紙数を割いているのは、ソ連共産党の第18, 19, 20回大会の記述のところである。このうち、第18回大会(1939)の直前については、すでは「肅清」(9.)を論じたさい(32ページ)少々触れたので割愛する。第19回大会(1952)の個人崇拜批判は、『六二年版』のみに存する。すなわち、大祖国戦争が終了した時期にすでに「個人崇拜の有害な影響がいちぢるしく現れた」²⁴⁰⁾と説くスターリン弾劾(延べ3ページ)は、『フルシチョフ五九年版』になく²⁴¹⁾、『同六二年版』に添加され²⁴²⁾、『ブレジネフ六九年版』で再び消えた²⁴³⁾。

だが、最も本格的なスターリン個人崇拜が最もまとまった形で展開しているのは、三つの党史において例外なく第20回党大会(1956)の箇所である。スターリン批判の幕をきっておとす発火点となったのが同大会席上のフルシチョフ秘密演説である史実からも、当然である。その最終部分において、それまでほぼ同一だった叙述は、三つの版でつぎのような差異をしめすにいたる。

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
	<p>党の個人崇拜批判の本質は、この崇拜の結果としての害毒を排除し、それによって社会主義の地歩を強化することによって、<u>党および国の生活においてイ・ヴェ・スターリンがはたした積極的な役割を十把ひとからげに否定すること</u></p>	<p>党の個人崇拜批判の本質は、この崇拜の結果としての害毒を排除し、それによって社会主義の地歩を強化することであった。</p>	<p>党の個人崇拜批判の本質は、この崇拜の結果としての害毒を排除し、それによって社会主義の地歩を強化することであった。</p>

237) *История КПСС* (1962), стр. 593.

238) *Там же*.

239) *История КПСС* (1969), стр. 524-525.

240) *История КПСС* (1962), стр. 622.

241) *История КПСС* (1959), стр. 607.

242) *История КПСС* (1962), стр. 622-624.

243) *История КПСС* (1969), стр. 549.

にはなかった。共産党、そしてイ・ヴェ・スターリンが指導的役割を演じた党中央委員会の指導のもとに、ソ連邦は発展し、巨大な世界史的な成功をおさめた。イ・ヴェ・スターリンは、ソビエトの国にとり、ソ連邦共産党にとり、全国際労働運動にとり、多くの有益な仕事をなした。

エヌ・エス・フルシチョフは述べた。「われわれは、同志スターリンの活動に、二つの側面があると見ている。われわれが支持し高く評価する積極的な面と、われわれが批判し排除する否定的な面とである。……わが党、われわれのすべては、党の事業、国民の事業に重大な損害をもたらした深刻な誤りと歪曲の廉で、スターリンを断固として非難する。」²⁴⁴⁾

エヌ・エス・フルシチョフは述べた。「われわれは、同志スターリンの活動に、二つの側面があると見ている。われわれが支持し高く評価する積極的な面と、われわれが批判し排除する否定的な面とである。……わが党、われわれのすべては、党の事業、国民の事業に重大な損害をもたらした深刻な誤りと歪曲の廉で、スターリンを断固として非難する。」²⁴⁵⁾

スターリンの活動のなかに、党は二つの側面を認め、肯定面は評価し、その否定面を批判し非難する²⁴⁶⁾。

三つの党史でスターリン批判が肯定・否定の両側面に分たれることを等しく指摘しつつも、『フルシチョフ五九年版』はスターリンの肯定面の強調に少からざる行数を費したが、『同六二年版』はその部分を全面的に削除し、『ブレジネフ六九年版』はこの前二版中に引用されたフルシチョフの言葉をカットし、「スターリンの肯定面は評価し、否定面は批判する」の一行で簡単に済ませている。ここにも、三つの版の特徴、なかんづくできうるかぎり〈沈黙は金〉の立場を固守せんとする『ブレジネフ版』の性格がよくでている。

× × ×

さて、以上 12 ケの例をあげてソ党史のスターリンにかんする記述を対比・検討した結果、²⁴⁶⁾「まとめ」として、『ブレジネフ六九年版』党史ならびにブレジネフ政権について何をいいうるか？

第一は、冒頭で一、二の例からテンタティヴに抽出した一般的定型^{バーテン} (25-27 ページ参照) がスターリンにかんするほぼすべての記述に共通のものとして妥当することが判明した結果、主張しうる特色である。つまり、『ブレジネフ六九年版』の特色は、『フルシチョフ五九年版』とともに、スターリン礼讃の『小教程』とスターリン批判色のもっとも濃い『フルシチョフ六二年版』との中間に位置するということである。このように「スターリン、の

244) *История КПСС* (1959), стр. 645.

245) *История КПСС* (1962), стр. 661.

246) *История КПСС* (1969), стр. 578.

党史と政権

取扱いにかんし、『ブレジネフ六九年版』が『フルシチョフ五九年版』ときわめて似かよっている事実から推しうるのは、次のことである。即ち、最近ブレジネフ政権下における「ネオ・スターリニズムの動き」が騒がれているが、1969年現在のスターリン復権の程度とは、『フルシチョフ五九年版』出版の1959年当時のレベルを出ないということである。『ブレジネフ六九年版』第二の特色は、その簡単な叙述形式にある。フルシチョフ期の二つのどの党史と比べても、『ブレジネフ六九年版』がその対象期間の増大とは反対に、その総ページ数を減少させていることは既述したが、このことは「スターリン」にかんする記述において特に際立っている。明らかに、ブレジネフ政権は、このデリケートな「踏絵」たる「スターリン」問題をできるだけ慎重に回避して、立場決定からくる種々の制約や不利益を免れ言動の自由を確保しようとしている。

(2) 「フルシチョフ、問題

—「歴史家は危険な人々である。彼らはすべてのものをひっくり返す力をもっている。」(フルシチョフ)²⁴⁷⁾—

フルシチョフ死亡時の東西の報道にあらわれたこのソ連政治の前任者にたいする評価の差異はまだ記憶に新しい。西側が「レーニン、トロツキー、スターリンと同列に並ぶソ連政治家」(『ニューヨーク・タイムズ』)と礼讃したのにたいし、当のお膝元のソ連政府は必要最低限度の事務的発表をおこなった切りだった²⁴⁸⁾。しかし、問題はこれで以ってソ連邦における「フルシチョフ」の最終的評価が下されたわけでは決してない²⁴⁹⁾ことである。否、むしろ、現政府によるごちない黙殺行為は、ブレジネフ政権による「フルシチョフ、問題」の最終的決定ができておらぬか、それを回避しようとする姿勢のように見受けられる。そして、それも無理はない。なぜなら、フルシチョフは、スターリンとは比較にならぬとはいえ、やはりその後の政権がもはや決して軽卒には扱えない象徴的価値を担った人物となっているからである。つまり、彼は、重大な自己矛盾と制約をもちつつも、スターリン批判という大事業を開始した人物であるからして、フルシチョフの賛否はそのまま彼のはじめた「非スターリン化」路線の継続、停止、逆行などの立場表明と解されるのである。ここに「フルシチョフ、問題」に真剣に取り組む意義と必要が生ずる。

A. 「フルシチョフ」の凋落

「フルシチョフ、問題」を論ずるに当って、事実上『スターリン小教程』(1938年出版当時フルシチョフは、一介(?)のウクライナ共産党第一書記)が除外されるのは当然であるが、のこりの三版のうち、フルシチョフ期の二版にかんしても略述した。(「歴史的概観(2)、(3)」)、つまり、『フルシチョフ五九年版』は巻末において急にフルシチョフを中心に押し出す傾向を示し、『同六二年版』はさらにその色を強めて、限定された意味とはいえフルシチョフ党史となった、と。そこで本節では主として、『ブレジネフ六九年版』における「フルシチョフ」の取扱いについて論ずることにするが、その特色は一言でいってフルシチョフの《格下げ》と要約しうる。フルシチョフ期の二版に見られたフルシチョフ・

247) Wolf. *op. cit.*, p. 43 から再引用。

248) “Nikita S. Khrushchev.” *The New York Times* (Sep. 12, 1971); *Правда* (13 сентября 1971), стр. 1.

249) 大淵人「フルシチョフとソ連民衆」、『世界』(No. 312, 1971年11月号), p. 328.

カラーが完全に払拭されたのみならず、さらに「フルシチョフ、弾劾の冷たいトーンが全編を貫流しているのである。

第一に、フルシチョフの「格下げ」は数字で証明可能である。すなわち、『フルシチョフ五九年版』や『同六二年版』にふんだんに盛り込まれていたフルシチョフの名称、役割や行動の叙述、発言、演説、著作からの引用などの回数が激減しているのである。別表の示すように、『フルシチョフ五九年版』、『同六二年版』においては、それぞれ37回、36回

三つの党史における政治指導者の登場回数

版	フルシチョフ	ブレジネフ	コスイギン
『フルシチョフ五九年版』	37 (6) } 計 43	4 (0) } 計 4	2 (0) } 計 2
『フルシチョフ六二年版』	36 (6) } 計 42	2 (0) } 計 2	1 (0) } 計 1
『ブレジネフ六九年版』	8 (0) } 計 8	19 (3) } 計 22	9 (0) } 計 9

() 内は引用文の回数

[木村作製]

フルシチョフについての言及があり、彼の演説や著作などからの引用回数(ともに6回)を加えると実に合計43回、42回だったのが、『ブレジネフ六九年版』においては、全巻を通じわずか8回(演説、著作からの引用はゼロ!)に激減した。10年近くにわたりソ連のワン・マン為政者の地位を占め、饒舌、多弁、自己顕示欲旺盛でソビエト紙上を賑わさない日はなかったフルシチョフの見るも無惨な(?)凋落ぶりである。ブレジネフと対比する時、このフルシチョフ言及頻度の不公平なアンバランスはいっそう際立つ。党史出版当時わずか5年間ソ連統治者の座を占めたにすぎない、この先例のないほど寡黙なブレジネフが、『六九年版』において、19回、3回の引用文を加えると、実に22回(フルシチョフのほぼ3倍)にわたってメンションされているのだ。フルシチョフは、今回の『六九年版』において、ほぼコスイギン(9回、引用ナシ)並みあるいはそれ以下の扱いといえよう。

フルシチョフ言及数がかつての43ないし42から8回に減少したということは、過去の版に35ないし34ヶ所にわたって存在した「フルシチョフ」の抹殺作業が『ブレジネフ六九年版』でおこなわれたことを意味する。紙数の都合によりその実例を1ヶにかぎりしめず。それは、従来のすべての党史(『小教程』を含む!)においてフルシチョフの名前が初登場する箇所なのである。その「国内戦(1918-20)後の時期に社会主義建設に功労あった指導者一覧表」の後半部分(20名)を比較してみよう。

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
スターリン	グーセフ	キーロフ	キーロフ
モロトフ	ジェルジンスキー	コシオール	コシオール
カリーニン	ジダーノフ	クラシン	クラシン
スヴェルドロフ	ゼムリャチカ	クルジジャンフスキー	クルジジャンフスキー
カガノヴィチ	カリーニン	クイブイシェフ	クイブイシェフ
オルジョニキツゼ	キーロフ	マヌイリスキー	マヌイリスキー
キーロフ	コシオール	ミコヤン	ミコヤン
クイブイシェフ	クイブイシェフ	ミヤスニコフ	ミヤスニコフ

党史と政権

ミコヤン	メフリス	オルジョニキツゼ	オルジョニキツゼ
ジダーノフ	ミコヤン	ペトロフスキー	ペトロフスキー
アンドレーエフ	オルジョニキツゼ	ポストゥイシエフ	ポストゥイシエフ
ペトロフスキー	ペトロフスキー	ルズタク	ルズタク
ヤロスラフスキー	ポストゥイシエフ	スヴェルドロフ	スヴェルドロフ
エジョフ	スヴェルドロフ	スクルイブニク	スクルイブニク
ジェルジンスキー	スターリン	スターリン	スターリン
シチャデンコ	フルンゼ	フルンゼ	フルンゼ
メフリス	フルシチョフ	フルシチョフ	
フルシチョフ	シュヴェールニク	シュルーパ	シュルーパ
シュヴェールニク	シチャデンコ	シュヴェールニク	シュヴェールニク
シキリヤートフ	ヤロスラフスキー	ヤロスラフスキー	ヤロスラフスキー
(計 29 名) ²⁵⁰⁾	(計 23 名) ²⁵¹⁾	(計 28 名) ²⁵²⁾	(計 27 名) ²⁵³⁾

一目瞭然なように、一貫した「スターリン個人崇拜批判」政策の波に抗してスターリンすら (!?) 生き残りえたリストにおいて、フルシチョフは『ブレジネフ版』で振り落されているのである。さらに注目すべきは、『ブレジネフ六九年版』(27 名) は『フルシチョフ六二年版』(28 名) のリストをそっくりそのまま踏襲する旧慣墨守方針を採り而もフルシチョフ 1 名のみはこれをカットする挙に敢えてでている (!) 点である。

B. 「十把一からげ」の操作

つぎに、『ブレジネフ六九年版』における、フルシチョフ〈抹殺〉の箇所ではなく、逆にフルシチョフ〈残存〉の箇所の検討に移る。その方が数が少く便利であるばかりでなく、興味も大きいからである。だが『ブレジネフ六九年版』においてフルシチョフが 8 ケ所にわたって〈残存〉しているといっても、旧来の記述と全く同一の形で残されているのでは決してなく、すべて微妙な変形がほどこされてのことである。

1. 『ブレジネフ六九年版』にフルシチョフが初登場するのは大祖国戦 (1941-45) にかんする記述、正確には 482 ページである。国内戦で登場させたフルシチョフ期の二版よりも、150-170 ページ分だけ遅れての登場といえる。換言すれば、『ブレジネフ六九年版』は国内戦から大祖国戦までの 25 年間フルシチョフがなんら党史記載に 価するだけの活動をおこなわず、また特筆すべき人物でもなかったとの立場をとっている。しかも、この箇所の記述をフルシチョフ期の二版の該当箇所と比べてみると、さらに興味深い変形に気づくのである。それは、一見なにげないようであるが、クレムリノロジストには決して見逃しえない指導者の配列〈順序〉の変化である。

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
	ソ連邦軍の主班には、 スターリン がすえられた。…… 軍隊の指導にはすぐれた党指導家、ウォロシロフ、ジダーノフ、マヌ	軍隊の指導にはすぐれた党指導家、ウォロシロフ、ジダーノフ、マヌ	全連邦共産党中央委員会は、多くの中央委員、中央委候補、すぐれた党

250) *Краткий курс*, стр. 234.

251) *История КПСС* (1959), стр. 314.

252) *История КПСС* (1962), стр. 329.

253) *История КПСС* (1969), стр. 298.

イリスキー、フルシチョフ、シチェルバコフが積極的に参加した。…	イリスキー、フルシチョフ、シチェルバコフが積極的に参加した。…ソ連邦軍の主班には、スターリンがすえられた。……	活動家たちを軍に派遣した。……
軍事会議は、経験にとむ党活動家—ブレジネフ、ブルガーニン、イグナートフ、カルンベンジン、キリチェンコ、クズネツォフ、ムジャヴァナツェ、スースロフその他が構成した ²⁵⁴⁾ 。	軍事会議は、経験にとむ党活動家—ブレジネフ、イグナートフ、カルンベンジン、クズネツォフ、ムジャヴァナツェ、スースロフその他が構成した ²⁵⁵⁾ 。	そのなかには、ブレジネフ、ウォロシエロフ、ジダーノフ、イグナートフ、カルンベンジン、クズネツォフ、マヌイリスキー、ムジャヴァナツェ、ポノマレンコ、スネチクス、スースロフ、フルシチョフ、シチェバコフその他がいた ²⁵⁶⁾ 。

『フルシチョフ五九年版』では ① スターリン→② フルシチョフ→③ ブレジネフの順、『同六二年版』では ① フルシチョフ→② スターリン→③ ブレジネフの順が、『ブレジネフ六九年版』ではスターリンを削除、アルファベット順を採用 ① ブレジネフ (B) →② フルシチョフ (X) の順序に変更している。これほど巧みな強調点転位の演出も珍しい。

2. 『ブレジネフ六九年版』でフルシチョフが二度目に登場するのは、第20回党大会(1956)の箇所である。同大会を歴史的なものにした「秘密演説」に触れるわけにはいかないにしろ、フルシチョフ期の二つの党史は、同大会の立役者フルシチョフのために独立のパラグラフを設け、「フルシチョフのおこなったソ連邦共産党中央委員会の報告では、ソ連の国際的地位と国内情勢が全面的に分析され、第19回党大会後の時期における党の活動が総括され、共産主義建設の展望が規定されていた²⁵⁷⁾と記した。だが、これを『ブレジネフ六九年版』は、「フルシチョフ、モスカートフ、ブルガーニンが報告した²⁵⁸⁾という一行ですませている。光栄ある一人舞台から、事務的な十把一からげ (one of them) への転落以外のなにものでもない。

3. 1957年の「反党グループ」との闘争の記述を比較すると、ここでもフルシチョフは実績(?)以下の取扱いを蒙っている。

『スターリン小教程』	『フルシチョフ五九年版』	『フルシチョフ六二年版』	『ブレジネフ六九年版』
	この斗争の過程で、フルシチョフ、幹部会員、同候補、中央委員会書記のアリストフ、ベリチャーエフ、ブレジネフ、キリレンコ、コズロフ、ミコヤン、ムヒジノフ、	この斗争の過程で、フルシチョフ、同様に幹部会員、同候補、中央委員のブレジネフ、キリレンコ、コズロフ、コスイギン、クーンネン、マズーロフ、ムジャヴァ	この斗争の過程で、幹部会員、同候補、中央委員のブレジネフ、キリレンコ、コズロフ、コスイギン、クーンネン、マズーロフ、ムジャヴァナツェ、ミコヤン、ポドゴ

254) *История КПСС* (1959), стр. 526.

255) *История КПСС* (1962), стр. 544.

256) *История КПСС* (1969), стр. 482.

257) *История КПСС* (1959), стр. 637; *История КПСС* (1962), стр. 652.

258) *История КПСС* (1969), стр. 571.

ポスペロフ、スースロフ、フルツェヴァ、シヴェールニク、その他党指導者は、反党グループに決定的に対立した²⁵⁹⁾。

ナツゼ、ミコヤン、ボドゴールヌイ、ポリャンスキー、スースロフ、シヴェールニク、その他の党指導者は、反党グループに決定的に対立した²⁶⁰⁾。

ールヌイ、ポリャンスキー、スースロフ、フルシチョフ、シヴェールニク、その他党指導者は、反党グループに対立した²⁶¹⁾。

つまり、フルシチョフ期の二版はともにフルシチョフを他に先駆けトップに記していたが、『ブレジネフ六九年版』では、他の者と同じリスト（アルファベット順）中に収め結局ブレジネフの後塵を拝しているのである。これは、1957年の対「反党グループ」闘争が結局フルシチョフ対マレンコフ、モロトフ、カガノヴィチの権力闘争以外のなにものでもなかった事件の核心を、アルファベット列举方式という平準化に名を借りて、故意に見誤らせようとする「歴史の歪曲」作業といわねばならない。

4. 四、五、六番目にフルシチョフが登場する例のまえに、七番目のケースたる第22回党大会（1961）の箇所を検討する。『フルシチョフ五九年版』にはとうぜん該当部分がないから、『フルシチョフ六二年版』と『ブレジネフ六九年版』の二つの比較となる。既述のごとく（18-20 ページ）この第22回党大会の開催そして同大会における『党綱領』の採択こそは、『フルシチョフ六二年版』刊行を促した主因の一つであり、事実、『フルシチョフ六二年版』は、『党綱領』（別名「フルシチョフ、綱領」）の路線「共産主義への移行」のカラーで色どられ、第22回党大会のためにあてられた一章においてフルシチョフの演説が3回も引用されていた²⁶²⁾。ところが、『ブレジネフ六九年版』では、第22回党大会そのものが独立の（五節からなる）一章から一節に縮小される（—そのかわりに、ブレジネフ期の第23回党大会に独立の一章が与えられた！—）とともに、この晴れの舞台での、フルシチョフについても、例の「十把一からげ」方式の一行で片付けている。「大会では、H. C. フルシチョフ、A. Ф. ゴルキン、Ф. Р. コズロフが報告演説をおこなった。」²⁶³⁾この書換えは、現ブレジネフ政権がフルシチョフのみならず、明らかにその路線の一部をも否定しようとする証左と解釈される。

C. フルシチョフの「罪状」

以上の「フルシチョフ」批判はまだ間接的である。フルシチョフの名が言及されるのこり四箇所はすべて、より直接的な形で厳しい「フルシチョフ」批判をおこなっている。とりあえずそれらを、以下に例示する（□—木村）

5. —「1958年3月ソ連邦閣僚会議議長にフルシチョフが任命された。これと同時に、フルシチョフは、ソ連邦共産党第一書記の役職に留任した。……その結果、集団制の原則の侵犯と、いくたの問題の処理にあたる場合で主観主義が見られるにいたった」。²⁶⁴⁾

259) *История КПСС* (1859), стр. 655.

260) *История КПСС* (1962), стр. 671.

261) *История КПСС* (1969), стр. 583.

262) *История КПСС* (1962), стр. 728, 729. 371.

263) *История КПСС* (1969), стр. 610.

264) *Там же.* стр. 586.

6. — 「フルシチョフが熟慮を欠いた『主観主義』的な措置をとった結果、『農業指導』の面での重大なあやまちがおかされ、『農業』発展に悪い影響をおよぼした」²⁶⁵⁾
7. — 「社会主義生産の『客観的発展法則』を厳密に考慮し、正しく活用する必要があった。にもかかわらず、『農業停滞』の原因の解明に実務的な態度でとりくみ、『農業』をさらに振興させる具体的施策をとろうとはせずに、フルシチョフは……『農産物』の生産と国家への売り渡しに関する国家計画が完遂されなかった罪を、現地の党組織とソビエト機関と『農業』組織になすりつけた」。²⁶⁶⁾
8. — 「総会は、老齢と健康状態悪化の理由から、中央委員会第一書記、中央委員会幹部会員およびソ連邦閣僚会議議長の職務を辞任したいとのフルシチョフの要請を承認した。総会は、こんご、同一の人物が中央委員会第一書記とソ連邦閣僚会議議長との『職務を兼任』することは不適切であると認定した」。²⁶⁷⁾

上の四つの引用文を素材として理解されるのは、ブレジネフ政権のフルシチョフ批判のポイントがつぎの三点にあることである。第一点は、フルシチョフが6年半(1958年3月-64年10月)にわたり「集団指導の原則に違反し、党第一書記と閣僚会議議長(首相)を兼務(совмещение)し権力を恣まにした」点である(5.と8.)。これは、要するにフルシチョフ個人への権力集中を非難しているのであるが、「権力集中」が独裁を特徴づける第一の要因²⁶⁸⁾たる点に鑑み尤もといえる。たしかに、フルシチョフ第一書記は、マレンコフを更迭後ブルガーニンを傀儡の閣僚会議議長に据えて(1955年2月～)自己の思いどおりの操縦をおこないえていたとはいえ、自己が党と政府のトップのポストを兼職して以後(1958年3月～)手中に収めた権限と行動の自由はそれ以前と比べようもなく大きかったのである。さらに、フルシチョフは、ロシア・ビュロー議長、新憲法作成委員会議長も兼任した。

フルシチョフ批判の第二点は、フルシチョフの統治スタイルにかんするもので、『ブレジネフ六九年版』は、『主観主義(субъективизм)』ないし「客観的法則の侵犯」なる用語で総括している。6.と7.はフルシチョフの名前が明示された場合にすぎず、その他フルシチョフの名前こそ直接引きあいに出さぬとはいえ、明らかにフルシチョフの『主観主義』(ほとんどの場合、イタリックで強調)的統治スタイルを批判している箇所は随所に散見される²⁶⁹⁾。

そしてフルシチョフの政策や路線ではなく彼の統治スタイルを『主観主義』²⁷⁰⁾也として弾劾するのは、従来ソ連内外ではほぼ合致をみているフルシチョフ解任の真因の説明を裏づ

265) Там же. стр. 587.

266) Там же. стр. 609.

267) Там же. стр. 628.

268) H. Lasswell & A. Kaplan. *Power and Society*. (London: Routledge & Kegan Paul, Ltd. 1952), p. 224.

269) たとえば、*История КПСС* (1969), стр. 627, 629, 630, 631, 632, 633.

270) たとえば、「主観主義」はソ連における政敵非難の常套語句であることに注意。たとえば、「利潤と価格の概念の重要性を無視したスターリンは主観主義の誤りを犯した」Л. Гатовский, “Роль прибыли в социалистической экономике.” *Коммунист*. (XXXIX, № 18, декабрь 1962), стр. 64-65 など。

ける。つまり、ブレジネフ新政権がフルシチョフ解任後出した唯一の公式声明（1964年10月14日付『プラウダ』論説）は、フルシチョフ（名ざしではないが）の「主観主義、夢想計画、尚早の結論、現実遊離の行動、大言壮語、無駄口」を非難した²⁷¹⁾。また、中国も後継ブレジネフ政権がフルシチョフの路線でなく方法のみを変えようとしていると揶揄した（「フルシチョフなきフルシチョフ路線」²⁷²⁾。さらに、西側も、仮に「フルシチョフ主義、なるものがある」とすれば²⁷³⁾、それは「速度と手法」(M. フラン克蘭ド)²⁷⁴⁾にあり、彼の失脚事由もその「個性と統治スタイルに求められねばならない」(P. E. モーズリー)²⁷⁵⁾と解釈していたのである。

フルシチョフ的手法のうち農業指導方法についてはとくに激しく弾劾され、それがフルシチョフ批判の第三点となっている。6. と 7. はフルシチョフの名前が明示されている二つの例にすぎず、その他彼の名称の言及なしに彼の農業指導の失敗を批判している箇所は枚挙に暇がない²⁷⁶⁾。そして、ここでも、指導の「主観主義」的方法が論難の決まり文句となっている。「フルシチョフが熟慮を欠いた主観主義的な措置をとった結果、農業指導の面で重大なあやまちがおかされた」²⁷⁷⁾、「農業生産性がこれほど急激に低下した原因は……相当程度、指導における主観主義……の欠陥によるものだった」²⁷⁸⁾、「1962-64年のあいだ……実際の農業指導は、主観主義的、恣意的な措置や行動がますます多くなり、農村の事態に悪影響をおよぼしていた」²⁷⁹⁾(傍点いずれも木村)、等々。

『ブレジネフ六九年版』におけるフルシチョフ農業指導批判は、たんに「主観主義」なるレッテルでの総合的なものにとどまらず、つぎのごとき具体的側面にまで及ぶ。(i) 1962年フルシチョフがおこなった党を農業—工業の二部門に分割する機構改革を、「正当な根拠を欠いた (неоправданная)」、「誤った (ошибочная)」、「人為的 (искусственная)」なやり方とみなした²⁸⁰⁾。(ii) フルシチョフがスターリンから受け継ぎ暗黙裡の前提としていたコルホーズ縮小論を、「コルホーズ体制の活力とコルホーズが発展する大きな可能性を過少評価したからこそはじめて起った傾向」ときめつけた²⁸¹⁾。(iii) フルシチョフ末期に加えられたコルホーズ員、職員、労働者の個人副次菜園²⁸²⁾に加えられた制限を、「主観主義的」、「愚かな (неразумный)」、「いわれない (необоснованные)」誤りと非難し

271) “Незыблемая ленинская генеральная линия КПСС,” *Правда*. (17 октября 1964), стр. 1.

272) たとえば、「フルシチョフはなぜ退陣したか」、『紅旗』（北京：外交出版社，1964年21=22合併号），p. 15.

273) Isaac Deutscher, *Ironies of History*, p. 121.

274) Mark Frankland, *Khrushchev*. (New York: Stein and Day, 1966), p. 148.

275) フルシチョフ解任事件直後、コロンビア大学 the Foreign Student Center でおこなわれた Philip E. Mosely (同大学前ロシア研究所長で当時ヨーロッパ研究所長) の講演から引用。

276) *История КПСС* (1969), стр. 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634.

277) *Там же*, стр. 587.

278) *Там же*, стр. 627.

279) *Там же*, стр. 628.

280) *Там же*, стр. 629.

281) *Там же*, стр. 632.

282) 木村汎「ソビエト家庭菜園—社会主義社会における“私的なもの”の地位と機能—」, 猪木正道・市村真一編『共産圏の政治・経済の動向』（大阪：関西経済センター，1972年刊予定）参照。

た²⁸³⁾。

ここで農業指導の失敗こそフルシチョフ失脚の真因との解釈に誘惑する資料に出くわす。即ち、『ブレジネフ六九年版党史』がフルシチョフ解任という1964年10月14日の歴史的事件に触れているのは、まさに以上の農業問題を正面の主題^{テーマ}として論じている箇所の中に挿入する形だからだ。この記述形式から読者は、ごく自然に、農業指導失敗の責任によりフルシチョフが解任され、後継者の任務もまた農業指導方法の改善にあったとの印象を受ける。だが、もちろん、われわれはそこで歴史の叙述＝真実でないという歴史学のABCを想起せねばならない。つまり、『ブレジネフ六九年版』によって指摘されたフルシチョフの「罪状」と彼の失脚の真因とはたしかに、恐らく無関係ではなく事実上重複しているであろう。だが、それは理論上あくまで別個独立の二つの事柄であるからして、その間につねに厳密な一線をひいて完全な同一視を回避すべき筋合のものである。(極端に言えば、フルシチョフ失脚の真因は、彼が要するにクレムリン内の権力闘争に敗れたという至極単純な事実^{事実}に尽きるのであり、彼のイデオロギー、政策、手法と全く無関係なこともありうるのだ。)ましてや、当のフルシチョフを追出して政権に就いたグループによって編纂された党史の説明がそのまま真の解任事由をなすと即断することは厳に戒しめるべきことである。にもかかわらず、他方このことは、なにも『ブレジネフ六九年版党史』がフルシチョフ糾弾のさい、「権力集中」、「主観主義」とならんで、「農業指導の失敗」に最大の力点をおいている事実そのものの意味をいささかも減ずるものではない。そして、さらに上記の限界を十分弁えれば、いぜんとしてフルシチョフ解任の真因解明のための一つの貴重な手掛りを提供するものなのである。

III. ブレジネフ政権

—「同志諸君、われわれは、科学技術革命の成果を社会主義経済体制の優位と有機的に結合し、社会主義固有の科学と生産の結合形態を広く発展させるといふ歴史的重要性を持つ課題に直面している。」(ブレジネフ)²⁸⁴⁾—

「スターリン時代は悲劇^{トラジディ}であり、フルシチョフ時代は笑劇^{ファルス}であり、いよいよこれから本格的なドラマがはじまるのだ」—これは、ブレジネフ政権発足直後の1964年10月モスクワで囁かれた小話という²⁸⁵⁾。その後ブレジネフ政権下に果してドラマらしいドラマが展開したか大いに疑問ではあるが、われわれ政治学的分析を使命とする者にとっては「スターリン」、フルシチョフ、問題を検討した後、党史を用いて「いよいよ本格的な」課題と

283) *История КПСС* (1969), стр. 633.

284) 傍点—原文イタリック。Л. И. Брежнев, *Отчетный доклад ЦК КПСС XXIV съезду КПСС (30 марта 1971 года)*. (Москва: Политиздат, 1971), стр. 101-2.

285) 木村浩「モスクワからの報告」、『ロシア文学の周辺』(東京:読売新聞, 1971), p. 326: やゝ類似の比喩として、「スターリンの暗黒 (darkness) 時代、フルシチョフのけばけばしい (flamboyance) 時代、ブレジネフの無表情のマネージャー (the faceless managers) 時代」というものもある。Martin Page, *The Day Khrushchev Fell*. (New York: Hawthorn Book, Inc., 1965), p. 169.

党史と政権

しての現ブレジネフ政権に取組む順番が来たといわねばならない。ところで、今回の『ブレジネフ六九年版党史』がブレジネフ政権自身について語っている個所の検討に移るまえに、今まで紹介した「スターリン」、「フルシチョフ」、問題からまず何か言えないだろうか？この党史の二つの勘どころを検討した後に結論として言いうるのは、ブレジネフ政権の二面価値性である。『六九年版党史』は一方においてフルシチョフ《主観主義》を痛烈に弾劾しながら、他方においてスターリンの全面的「復権」もおこなわなかった。すなわち、スターリンのプラス面(?)を積極的に評価し直したがそのマイナス面である「個人崇拜」批判の態度を堅持したのである。要するに、ブレジネフ政権は、「スターリン」とも「フルシチョフ」とも同一化せず、「第三の途」を歩もうとしているようである。では、「第三の途」とはなにか？寡黙、曖昧模糊、態度決定の嫌いなブレジネフ政権からそれを窺い知ることは至難の技である。しかし『六九年版党史』からそれらしきものを探索し、その実現可能性を併せて検討してみよう。

A. 「集団指導制」

「総会は、こんど、同一の人物が中央委員会第一書記とソ連閣僚会議議長との職務を兼任することは不適切である、と認定した……総会は、党中央委第一書記にブレジネフを選出した。これと同時に、最高会議幹部会は、コスイギンをソ連閣僚会議議長に任命した。ソ連共産党中央委員会10月総会は、党の歴史に重要な一時期を劃した総会である。……総会はもっと重要なレーニンの原則、すなわち「集団指導制」が微動さえないことを強調した。総会の決定は、……「集団指導制」をきびしく無条件に守ろうとする配慮につらぬかれている」²⁸⁶⁾(□□—木村。以下同じ)。

ブレジネフ政権は、前任者スターリン、フルシチョフの政権がいずれも比類ない「権力集中」を特色とするワン・マン独裁に終わったことを反省、集団指導制という未曾有の実験に挑戦しているように見える。最近とみにブレジネフ書記長の権力が強化されたと診断すべき多くの証左があげられる反面、彼がいぜん(?) *primus inter pares* にすぎずスターリン、フルシチョフの如き独占的権力を手中に収めていないことは確かである。とはいえ、その結果成立している「集団指導制」をただ単に現政権担当者たちの意識的な努力の所産とのみ理解してそれが永遠に続くものと早合点してはならない。その理由は、少なくとも二つある。一は、ソビエト・イデオロギーの中に「集団指導制」を否定する契機が潜んでいるからである。即ち、ソビエト体制は、それがレーニンの「前衛」概念を中核とするかぎり、ローザ・ルクセンブルクやトロツキーがつとに警告し亦現実のソ連史そのものがそのなによりの生き証人であるように、究極的には歴史法則の唯一の正しい解釈、適用者としてのワン・マン独裁者にまで収斂する原理的必然性を内臓している。二は、現ソ連の偶然的でプラクティカルな事情が「集団指導制」成立の真因と疑われるからである。即ち、現在のクレムリンには、かつてのスターリン、フルシチョフのごとき個人崇拜の対象となるに

286) *История КПСС* (1969), стр. 628-629.

十分な強烈で「色彩豊かな (colorful)」²⁸⁷⁾ 人材を欠いている。存在するのは、矮小な書記官²⁸⁸⁾ないし「灰色のフランネルの背広を着た」²⁸⁹⁾ マネジャー・タイプばかり。そして、これら小粒リーダーたちの競立・均衡・妥協（現象的には「議会主義に類似した一種のデモクラシー」²⁹⁰⁾のルールが作動さえしている！）—これこそが、ソ連史上稀有な「集団指導制」を期せずして成立させている真相なのである。だとすれば、このような特殊事情の喪失、すなわち隔絶したカリスマ的指導者の登場によって、ブレジネフ「集団指導制」は早晚崩壊する過渡的現象ともみなしうるであろう。

B. 《客観主義》

—「党中央委員会は、軽卒に流れず、大げさに騒ぎたてることなく、…国の社会生活と経済の実態を深く 慎重に 分析し、共産主義建設の課題をいっそうみごとに解決する方途をさだめた」²⁹¹⁾。

—「党と中央委員会は……社会主義の 客観的 法則に応じながら、科学的に裏づけられた経済指導方法の作成に着手したのである」²⁹²⁾。

既述のごとく『ブレジネフ六九年版党史』は、フルシチョフ政権の一般的統治スタイルを、「軽卒」、「現実遊離」、なかんずく《主観主義》なる語で総括して攻撃した。そして、このこと自体すでにブレジネフ政権がこれらのレッテルで表わされるのと正反対の方針で統治に臨む決意を十分物語っていたが、『同党史』は、ブレジネフ政権のモットーがすべて物事を「慎重 (вдумчиво)」、「科学的 (научно)」、「客観的 (объективно)」に処する点にあることを、正面から宣言している。だが、《主観主義》なるレッテルはソ連における政敵論難の常套語句であり²⁹³⁾、なにもブレジネフ政権によるフルシチョフ向け使用をもって嚆矢となすわけではない。それ故、フルシチョフ《主観主義》vs. ブレジネフ《客観主義》の対照図式は格別漸新なものではない。ところが、《科学主義》というスローガンとなると事情は大いに異なってくる。それは、ブレジネフ政権をしてフルシチョフを含む

287) Severyn Bialer 発言。“The New Russian Leaders,” 米国 WNBC 放送 *Open Mind* シリーズ 特集座談会 (1964年11月15日 p.m. 12:5-a.m. 1:00)。その後、フルシチョフに比べ彼の後継者たちを「より色彩の乏しい (less colorful)」と規定するのは常套的となった。たとえば、*The New York Times* (April 4, 1965; May 2, 1966); Adam B. Ulam, *Expansion & Coexistence: the History of Soviet Foreign Policy 1917—67*. (New York: Frederick A. Praeger, 1967), p. 153; Frederick C. Barghoon, “Changes in Russia: the Need for Perspectives,” Zbigniew Brzezinski (ed.), *Dilemmas of Changes in Soviet Politics*. (New York: Columbia University Press, 1969), p. 41 など。

288) これも、Zbigniew Brzezinski, “Victory of the Clerks: What Khrushchev’s Ouster Means,” *The New Republic*. (Nov. 14, 1964), p. 15 以来の常套句。

289) *Time*. (Vol. 84, No. 17, Oct. 23, 1964); *The New York Times* (April 4, 1965). たゞし、この「灰色のフランネル・スーツを着た共産主義者」という表現は、すでにフルシチョフ指導部を揶揄しても用いられた。Henry Tanner, “The Communists in Gray Frannel Suits,” *The New York Times Magazine*. (April 2, 1964), p. 11.

290) Robert Daniels, “Soviet Politics Since Khrushchev,” p. 23.

291) *История КПСС* (1969), стр. 629.

292) *Там же*. стр. 630.

293) 前出注 270) [46 ページ] 参照。

ソ連歴代政権からとくに際立たせる表看板ととらえるべきである。では、何故そうであり、そこにはいかなる問題点が含まれているのか？ 最後に、これにつきやや詳しく論じて、本稿の結びとかえよう。

C. 《科学主義》とそのジレンマ

—「党は、ひとつの鎖のようにつながった共産主義建設のなかで、基本的な一環を正しく規定したのである。それは、国民経済の全分野で科学・技術上の進歩を最大限に促進するという事であった。

科学・技術の最新の成果をひろく生産にとり入れることがどうしても必要なのは、共産主義社会の建設が科学・技術革命という状況のもとで進行するものだからである。……党は、科学・技術の進歩を労働生産性向上の主要な方途とみなしている。……

正しい技術政策をたて、科学・技術的進歩の最大限の促進を全面的に促すような社会主義的国民経済の組織形態を模索することが、ソ連の社会生活を党が指導し、方向づける役割の重要な現われのひとつとなった。……党、党組織、党員の使命は、学者、設計者、技師、技術者、労働者およびコルホーズ員の創造的イニシアティブを、もっとも重要な科学的諸問題の解決と科学・技術の成果の生産への早急な導入に向けることにある。

党は、これらの諸問題をその日常活動の中心にすえた」²⁹⁴⁾(傍点—原文イタリック)。

もちろん、ブレジネフ以前の歴代のソビエト指導者たちが、科学技術の重要性に注目しなかった訳ではない。否、むしろ技術進歩こそは、「民族的目標 (goal) で、ロシア共産主義支配の主な正当性 (legitimation)」(G. グロスマン)²⁹⁵⁾だったと言うべきである。レーニンは「共産主義とは、ソビエト権力プラス全国の電化」と定義し²⁹⁶⁾、スターリンも「ポリシェヴィキは技術を取得せねばならぬ」と叫んだ²⁹⁷⁾。とはいえ、全体として当時はまだ科学技術よりも人海戦術的に動員された労働力の総和が経済発展の決め手となる時期だった。そして、この「人間労働力 (труд человека)」の物神性は、フルシチョフ期にまで引き継がれた。「労働によって、そして労働によってのみ、共産主義の物質的・技術的基盤を造りだすことができる」(フルシチョフ)²⁹⁸⁾。これは、鉱山労働者から身を興したフルシチョフによる自己の人生哲学の国家的規模への拡大の一例であるが、客観的・経済状況は、政策の転換を強く要求していた。そして、ブレジネフ政権の成立とともに、きわめて遅まきながら、科学技術への力点移動が宣言された。「科学技術の進歩—それは、共産主

294) *История КПСС* (1969), стр. 623.

295) Gregory Grossman, "Innovation and Information in the Soviet Economy, *The American Economic Review*. (Vol. LVI, No. 2, May 1966), p. 118.

296) В. И. Ленин, *Полное собрание сочинений. (издание пятое)*. (Москва: Госполитиздат, 1963), Том 42, стр. 30. 邦訳『レーニン全集』(東京: 大月書店, 1964), 第31巻, p. 422.

297) И. В. Сталин, *Сочинения*. (Москва: Госполитиздат, 1952). Том. 13, стр. 41; 邦訳『スターリン全集』(東京: 大月書店, 1958), 第33巻, p. 63.

298) С. П. Фигурнов, *Строительство коммунизма и рост благосостояния народа*. (Москва: Издательство Социально-экономической литературы, 1962), стр. 204 から再引用。その他、類似の発言として、*Правда*. (8 июля, 1960); *Правда*. (3 апреля 1964) 参照。

義の物質的・技術的基盤をつくるための主要な梃子である」(ブレジネフ)²⁹⁹⁾。かくして、曾つてレーニン期において「(精神的)情熱」、スターリン期において「(物理的)強制」、フルシチョフ期において「(物質的)報酬」が占めていた地位を、ブレジネフ期においては「(科学的)技術」が占めることになったのである。

しかし、ブレジネフ、コスイギン & Co. が科学技術を重視する³⁰⁰⁾のは、なにも彼らが技術屋出身という事情にばかり基くのではない。彼らが私情を超えてこの問題に真剣に立ち向かわなければならぬ客観的状況が存在するのである。それは、一言でいって最近10-20年にソ連邦と世界の先進国との間に広がった技術革新におけるギャップである。たしかにソ連は世界に先駆けて人口衛星^{スプートニク}を打ちあげ、石炭、鉄鋼生産額でも米国に追いつき

世界主要国のコンピュータ設置台数

国名	1968年	1969年	1970年
アメリカ	55,606	61,977	62,685
日本	3,559	5,601	5,900
西ドイツ	5,007	5,256	6,350
イギリス	2,953	3,874	5,910
フランス	3,271	3,650	4,500
ソ連	3,000		4,500
イタリア		2,400	2,730
東独			200
チェコ			200
ポーランド			130

日本経営情報開発協会編『コンピュータ白書1969』、『同'70』、『同'71』などから作成³⁰²⁾。

追いつこうとしており、おそらくミサイル兵器の貯蔵でも米国を追い越すに違いない。だが、その反面、人間の月ロケット着陸では米国の後塵を排し、トランジスタ、エレクトロニクス、コンピュータ等の超先進工業部門では日本にもいちぢるしく立遅れ、自動車、プラスチック、化学製品など優秀な消費物資を国民に提供しえないでいる。一例として、コンピュータをとってみよう。「電子技術時代 (technetronic era)」³⁰¹⁾たる現代文明の象徴といわれるコンピュータ設置台数におけるソ連の劣勢は、左表から一目瞭然であろう。これが、「従来

科学技術の成果を国民経済に導入する問題がわが国の計画に十分反映していなかった」(ブレジネフ)³⁰³⁾結果なのである。そして、もしこのような状態が続けばソ連がほどなく二流工業国に転落してしまうとの憂慮の声すら国内から発せられている。その代表者のひとり A. サーハロフは、ソ連首脳宛て公開状で警告する。「第二の産業革命、が到来した70年代はじめの今、われわれはアメリカに追いつくどころか、ますます後方へ転落しつつあ

299) Л. И. Брежнев, *Отчетный доклад ЦК КПСС XXIV съезду КПСС (30 марта 1971 года)* (Москва: Политиздат, 1971), стр. 101.

300) 1968年10月に「科学技術の向上と国民経済への科学および技術の成果の利用の促進についての諸方策にかんする」党中央委合同布告が發布されたのはほんのその一例。“О мероприятиях по повышению эффективности работы научных организаций и ускорению использования в народном хозяйстве достижений науки и техники,” *Правда*. (23 октября 1968), стр. 1-2.

301) Zbigniew Brzezinski, *Between Two Ages: America's Role in the Technetronic Era*. (New York: The Viking Press, 1970).

302) “Why Russia can't catch up without Western knowhow,” *U.S. News & World Report* (Jan. 25, 1971), p. 55; “Russia's New 5-year Plan: Crucial Test for Red System,” *U.S. News...* (April 5, 1971), p. 21 も参照。

303) Л. И. Брежнев, *Отчетный доклад ЦК КПСС XXIV съезду КПСС*, стр. 100.

る」³⁰⁴⁾と。

さきに長々と引用した、『ブレジネフ六九年版党史』において執拗に繰り返かえされている「生産への科学技術の成果の導入」、「科学技術の進歩こそ労働生産性向上の主要な方途」のスローガンは、このような深刻な事態にたいするブレジネフ流の治療策なのである。だが、このようなスローガンやモットーの徒らな連呼(それにソビエト国民は倦み飽きている!)によって事態が一向に改善されず、「知的自由の保障」以外にその抜本的解決策のないことが内外で指摘されている。ソ連内での論者サーハロフ曰く、「問題の解決には、経済体制のあらゆる水準に幾百万民衆が創造的に参加し、広く情報とアイディアの交換をおこなうことが要求される。」³⁰⁵⁾ だが、たとえ知的自由一般が真に創意工夫を保証するものだとしても、それがソ連型「社会主義」の中核をなす一党独裁原理を浸触するものとして断固峻拒されねばならぬことは、1968年のチェコの経験からあまりにも明瞭である。

現指導部は、「科学技術の刷新」を叫ぶ傍ら、必ず他方において「労働規律の強化」、「イデオロギー昂揚」というタガを引締める処置を忘れない。つまり、現政権の胸中にあるのは、科学とイデオロギーとの円満な結婚という東独版の《科学志向型共産主義国家 (science-oriented communist state)》³⁰⁶⁾(—そこでは、「プロシヤ流規律、ドイツ的科学能率、マルクス主義思想の結合」³⁰⁷⁾が意図されている—)の青写真のようである。しかし、本来合理的な科学思想は特定のイデオロギーにたいする盲目的脆性にも批判の眼を向け、その非合理的基盤を衝かなければやまない性質をもつ。そこに科学の許容点の限界が生れる。

以上のように、ブレジネフ政権の科学的技術の導入を梃子とする経済発展の「第三の途、もまた行き詰る運命にある。即ち、一方でいくら創意、イニシアティブを奨励しても、他方で知的自由一般の制限、労働規律、イデオロギー闘争を強化するのでは、「アクセルを踏みながらブレーキをかける」³⁰⁸⁾ようなものである。このようなジレンマのを担った経済改革が、その鳴りもの入りの宣伝にもかかわらず、低迷するソ連経済の打開策となりえなかったのは、なによりの適例である。「治療すべき疾病の症候群 (symptoms) でなく、真の原因 (causes)」³⁰⁹⁾にメスを入れる仕事は、どうやらブレジネフ、コスイギンでなく、次の政権へ持ちこされたように思われる。

〔付記〕 本稿は昭和46年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。

304) A. D. Sakharov and others, "Appeal to the Party-Government Leaders of the USSR (March 10, 1970)," *Survey*. (No. 76, Summer 1970), p. 162. 極論として周知のごとく「ソ連は1984年まで生きのびるか?」という問を提出するソ連の歴史家もいる。Andrei Amalrik "Will the USSR Survive until 1984?" *Survey*. (No. 73, Autumn 1969), pp. 47-79.

305) Andrei D. Sakharov, *Progress, Coexistence and Intellectual Freedom*. (London: Penguin Books, 1968), p. 25. 上甲太郎・大場寿一訳『進歩・平和共存および知的自由』(東京: みすず書房, 1969), p. 25.

306) Brzezinski, *Between Two Ages*. p. 170.

307) *Ibid.* p. 171. ただし文章を一部変えた。

308) 堀健三『ソ連経済と利潤』(東京: 弘文堂, 1966), p. 9. ただし文章を一部変えた。

309) Gertrude E. Schroeder, "Soviet Technology: System vs. Progress," *Problems of Communism*. (Vol. XIX, No. 5, Sept.-Oct., 1970), p. 23.

The History of the C. P. S. U. and the Soviet Regime : A Historical and Comparative Study

Hiroshi KIMURA

The historiography of the communist party in the USSR, dealing with most sensitive political issues, can fruitfully be examined as an explicit reflection of the features of the political regime at the given moment. This paper thus attempts to analyse the content of *The History of the Communist Party of the Soviet Union (1969)*, in comparison with its three predecessors of the Stalin and the Khrushchev periods, in order to trace the fundamental orientation of the "ambiguous" Brezhnev-Kosygin regime.

After the rather detailed historical review of four editions of the single-volume *History of the C. P. S. U.* in Part One, which provides a necessary preparation for further discussion, Part Two deals with the comparison of how each edition of the History of the C. P. S. U. under different political regimes treats specific issues of political significance. Two key issues thus singled out are the "Stalin" and "Khrushchev" problems which are believed to serve as a barometer of political atmosphere of each regime.

The approaches to the problem of "Stalin" in four editions are classified clearly as follows ; no doubt the *Short Course* (1938) treats "Stalin" as the demigod ; in contrast, *the History of the C. P. S. U.*, issued in 1962 when Khrushchev's power reached its apex, is very critical of "Stalin." Both *History of the C. P. S. U.* (1959) under early Khrushchev period and the *History of the C. P. S. U.* (1969) under Brezhnev period fall somewhere between these two extremes in the treatment of "Stalin." Further, it is exemplified that in such sections as collectivization, the purges, World War II, the treatment of "Stalin" in the 1969 edition often goes back to that in the 1959 edition. Accordingly we may conclude that the Brezhnev regime in its "Neo-Stalinism" has not shifted so much as imagined, only to the level of 1959.

It is very obvious that, on the other hand, "Khrushchev" has fallen down from the hero of two editions of Khrushchev era into a figure of insignificance in the 1969 *History of the Communist Party of the Soviet Union*. For example, his name used to be mentioned 42-43 times in the Khrushchev editions, but in the 1969 edition only 8 times (while Brezhnev's name being mentioned 22 times!). Furthermore, at these eight places dealing with Khrushchev in the 1969 edition Khrushchev is directly and severely criticized as guilty in the following three points ; (1) the concentration of power ; (2) the "subjective" style of governing, and (3) mismanagement of agriculture.

Part Three traces the basic line of the Brezhnev-Kosygin regime which somehow does not like to talk much about its own position. Without identifying itself either with "Stalin" or with "Khrushchev", the Brezhnev-Kosygin regime seems to choose the third path. What is the third path then ? So long as we judge it by the 1969 *History*

党史と政権

of the C. P. S. U., it is “the science-oriented communism” which attempts to combine the encouragement of initiative for scientific innovation with strict discipline and control of Marxist doctrine. In this case, however, the problem of how to train the Soviet people into more scientific-minded while discouraging them from doubting the ideological myth of the infallibility of the Party seems to remain to be resolved.